

41399

教科書文庫

4
810
3-1940
01304 49513

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

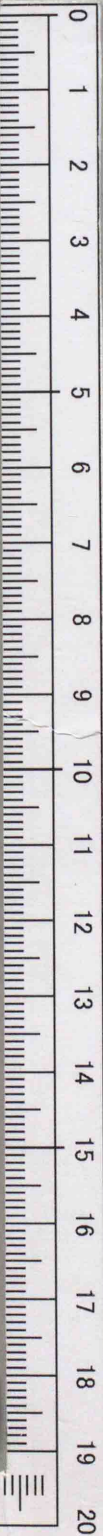


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



中央図書館



小學國語讀本 卷九

尋常科用

文部省

広島大学図書

0130449513



目録

第一	四月……………	一	第十五	晴間……………	七十一
第二	春の夜……………	五	第十六	三日月の影……………	七十四
第三	飛行機の發明……………	七	第十七	圖書館……………	九十二
第四	八幡太郎……………	十八	第十八	星の話……………	九十九
第五	松下禪尼……………	二十	第十九	京城へ……………	百六
第六	手まり……………	二十二	第二十	僕の子馬……………	百十四
第七	小さなねぢ……………	二十三	第二十一	母馬子馬……………	百二十三
第八	軍艦生活の朝……………	三十二	第二十二	秋のおとづれ……………	百二十六
第九	馬どろへ……………	三十九	第二十三	袴垂……………	百三十
第十	松平信綱の幼時……………	四十三	第二十四	ひざ栗毛……………	百三十三
第十一	雀の子……………	四十七	第二十五	空の旅……………	百四十五
第十二	アメリカだより……………	四十八	第二十六	もくせいの花……………	百五十八
第十三	佛法僧……………	六十二	第二十七	橘中佐……………	百六十
第十四	いも掘……………	六十八	第二十八	國語の力……………	百六十六

尋國九

第一 四月

四月といへば、春はもうなかばである。月の初はまだ寒くて、冷たい雨の降りしきることもあるが、其の間にも、柳やなぎの芽の緑が日ましに太り、畠や道端の若草が目に見えてのびて来る。桃の花は三月の末頃咲出して、此の月の初に、そろ／＼花盛りを見せる。待たれるものは櫻である。早い年には、三月の末か四月のごく初に、蕾つぼみのほころびることがあるが、さういふ年には、季節はづれの雪が降つたりして、せつ

季

分

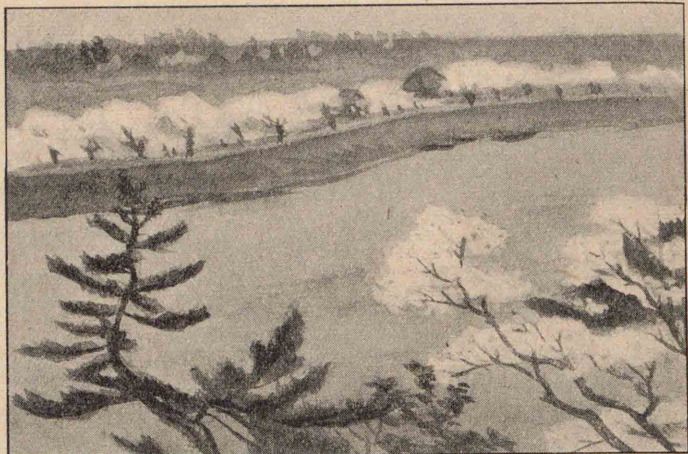
かくの花をだいなしにする。さうでなくても、二三分咲きかけた所へ、よく意地わるの雨が降りそゞく。雨が止んで嬉しやと思ふ夜半から、途方もない南風が吹出して、花をいためつける。花の咲く頃は、何時もかうして氣をもむことが多い。

それにしても、毎年花は必ず咲くものである。暖な春の日が一日か二日も續くと見れば、櫻といふ櫻は、ほとんど残らず咲きつくして、野も花、山も花。庭も、軒端も、川端の堤も、学校の運動場も、神社寺院の境内^だも、一時に花で埋まる。かうなつては、とてもうち

堤端

尋國九

幸



にじつとしてあられない。男も、女も、老人も、子供も、ありとあらゆる人間は、花を尋ね、花に浮かれて出て来る。人ばかりではない、小鳥も、蝶^{てふ}も、蜂^{はち}も、そう出で、一年に二度とない此の花盛りを、一時でも長く楽しまうとするかのやうに見える。

幸にして日は長い。朝かなり早く起きたつもりでも、もう太陽はうらくとのぼつてある。雲雀^{ひばり}の

歌がかすんだ空にのどかに聞かれる。一日を遊び暮し、遠く入相の鐘かねのひびきを聞いても、なほ長堤の櫻は、夕日に映じてはなやかに咲續いてゐる。

味が
花が散つて、始めて人の心が落着く。春ののどけさが、ほんたうに味はられる。野末のすみれたんぽぽきんぽうげ、畠一面に咲く菜の花、さうしたものにしみぐくと春の幸福を感じる。

淡
しかし、自然しぜんはしばらくもどまつてゐない。木の梢は、片端から芽を吹出す。けやきの大木が、淡褐色かつしよくにぼつと大空をいろどる。楓かへの芽の紅が、ゆめ

紅|浅|緑|映|重

のやうに廣がる。黄に、淡紅に、浅緑に、梢々が煙るやうに見え、やがてそれがぼゞ一様の若緑の色に映え出す頃は、もう八重櫻も散りはてて、行く春を惜しむ心が、そろそろ胸にせまつて来る。

第二 春の夜

暖い晩だ。

よひから、赤ちやんがすやくくと眠つてゐる。

遠い汽笛

しめやかに下駄げだの音

どこかでどつと笑ひ聲。

暖い、さうして

何か、あたりが

うきくくとぞよめく晩だ。

アネモネや

チューリップの蕾つぼみが、

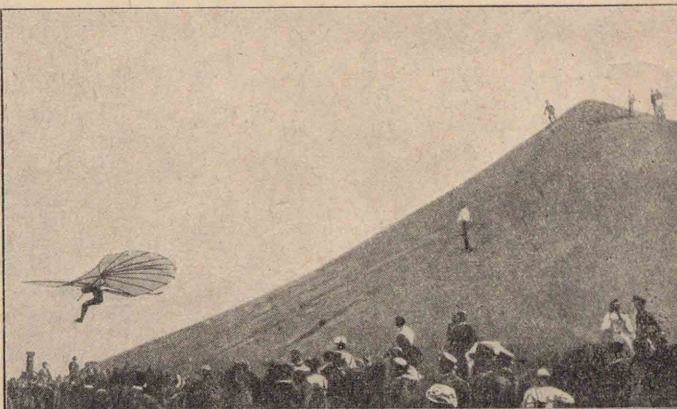
表 翼

ぐんぐんふくらみさうな晩だ。

第三 飛行機の發明

空飛ぶ鳥を見て、自分もあゝいふ風に飛んでみた
いと思ひ、いろく工夫をこらした人は、かなり古く
からあつたやうです。我が國でも、今から百數十年
前、岡山かうきちの幸吉といふ表具師はとが、鳩の體を研究して大
きな翼をこしらへ、それをあやつりながら屋根から
飛んで、人々を驚かしたといふ話があります。
ドイツのり、エンタールも、同じやうに鳥から思

縦操

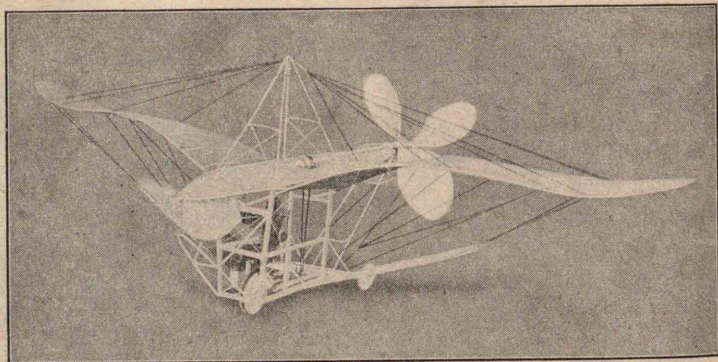


から落ちて死んでしまひました。これは我が明治二十九年八月のことでした。

ひついで、翼に似た物を作りまし
た。それを體に着けて、岡の上か
ら一思ひに飛んでみると、意外に
うまく空中を滑走することが出
來ました。それ以來、彼はますま
す研究を重ね、滑走機を改良して、
其の操縦に熱中しましたが、或日
突風にあふられて自由を失ひ、空

尋國九

「同じ頃、我が國では、愛媛縣の二宮忠八といふ人が、鳥や蟲の飛ぶのをくはしく調べて、飛行機の模型を作りました。それには、プロペラや車輪まで工夫して附けてあるのですから、もう滑走機ではなくて、りつぱな飛行機です。たゞ動力がなかつたので、これを飛ばせてみる事が出来なかつたのは、實にざんねんなことでした。」
「アメリカ合衆國のラングレーといふ人も、また飛



行機の模型を作りました。彼は次から次へと模型を作つて研究を進め、動力についてもいろ／＼考へた末、小さい蒸氣機關を作つて取附けることに成功しました。かうして出来上つた彼の模型飛行機は見事一氣に千米も飛んで、當時の人々をあつといはせました。それは、ちやうどリ、エンタールが死ぬ三箇月程前のことでした。

ラングレーは、其の後飛行機の實物を作ることに一生けんめいでしたが、さていよく試験しけんをしてみると、うまく行きませんでした。二回やつて、二回と

敗失

もこはれてしまひました。模型はりつぱに飛んだのに、實物はとう／＼失敗に終りました。
同じアメリカ合衆國に、ライトといふ兄弟がゐました。兄をウイルバー、弟をオービルといひましたが、二人は、小學校に通ふ頃から、何よりも機械が大好きでした。

リ、エンタールが死んだことも、ラングレーが模型飛行機を飛ばせたことも、彼等は、世間の人々以上に、其の記事を熱心に讀みました。といふのは、彼等もまた飛行機を作ることが、年來の望であつたから

得 州

です。

兄は、何でも理くつて考へる方でした。弟は、理くつよりも實際じつさいの物を作るのが得意でした。

明治三十三年の夏、二人は、北カロライナ州の砂山のある所を見立てて、そこで滑走機の實驗をしてみました。いろくくの形の滑走機を作つて試験をしてゐる中、翌年の夏、百米以上も空中を滑走することが出来ました。

次に、發動機について研究しました。ガソリン發動機がよいとは思ひましたが、まだ其の頃は、輕くて

成

強い力が出るものがありませんでした。二人は、苦心に苦心を重ねたあげく、どうやら適當てきとうな物を作ることに成功しました。それから、プロペラについても、いろくくと工夫をこらしました。

明治三十六年十二月十四日、今日こそ、二人の苦心に成る飛行機を飛ばせようといふのです。上天氣で、風がちつともありませんので、砂山の上へ機を運んで、斜面しゃめんを滑らせながら飛ばせることにしました。兄のウイルバーが、最初に乗りました。プロペラが廻轉すると、機は勢よく斜面を滑つて下りました。

廻

さうして、十數米も滑走した頃、機は果して地面をはなれました。

しかし、二三米空中に上つたと思ふと、急にふらふらとして、飛行機は地上に落ちてしまひました。其のため、機體は幾分破損しました。かうして、此の日の試験は失敗に終りました。

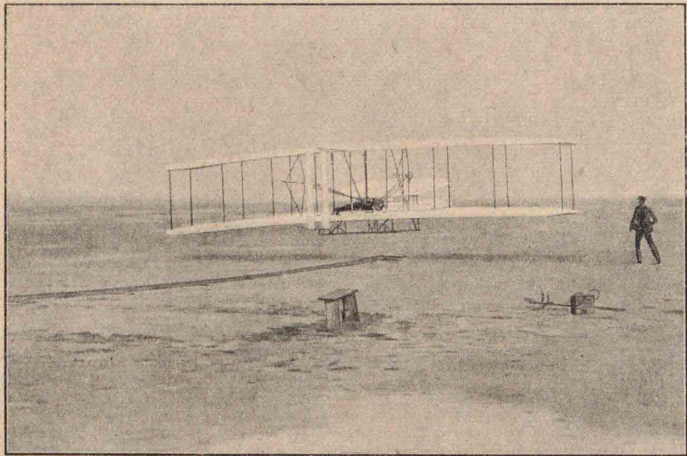
それから二日間、二人は機の修繕しうぜんに一生けんめいでした。

三日目の十二月十七日が來ました。朝から大分風が烈しいので、しばらく見合はせてあましたが、や

がて幾分静まつた頃、二人は機を引出しました。今日は、平地でも飛べるだらうと思はれました。

今度は、弟のオービルが乗りました。機は、風に向かつてゆるると滑走し始め、十數米走つて、ふはりと空中に浮かびました。

風が強いので、機は上へ下へ動揺どうえうします。それでも三十六米ばかりを見事に乗切つて、地



秒

上に下りました。 たつた三十六米、時間にしてわづか十二秒でしたが、しかし、動力による飛行機が、人間をのせて空中を飛行することに成功したのは、これが始めてだといはれてゐます。

其の日は、なほ二回・三回と試験をくりかへしました。 さうして、其の都度成績が上つて行くやうでした。 四回目に、兄ウイルバーが乗つた時は、非常に調子よく飛んで、五十九秒、二百六十米といふ好成績を収めました。

それ以來今日までわづか三十幾年を経たに過ぎ

績 調 好 收 經

輸送

術遂

類

ませんが、ちう返りや木の葉落しの妙技に、世間が驚の目をみはつたのももう昔のこと、今では、大陸といはず大洋といはず、飛行機が自由自在に空中を飛んで、旅行に、輸送に、軍事に、すばらしい活躍を見せてゐます。 もちろん其の間、飛行機は日々に改良せられ、飛行技術もまた非常な進歩を遂げたのですが、それにしても其の最初といへば、ライト兄弟の苦心に成つた十二秒乃至五十九秒の飛行で、これが實に飛行機における人類最初の輝かしい成功記録であつたのです。

第四 八幡太郎

八幡太郎義家、或日安倍宗任を召連れて、廣き野を過行きしに、狐一匹、目の前に走り出でたり。義家、背中のうつばより、かりまたの矢を抜きて弓につがへ、狐を追ひかけしが、射殺さんもふびんと思ひ、左右の耳の間をねらひてひようと射る。矢はあやまたず狐の頭上をすれくにかすめて、鼻先なる土にぶすと突立ち、狐は其の場に倒れたり。宗任、馬より下りて狐を引上げ、



「矢はあたらぬに、狐は死にて候。」と申せば、義家、驚きて倒れたるなり。捨ておけば、間もなく生きかへるべし。」といふ。宗任すなはち矢を抜取りて差出せば、義家くるりと背を向けて、うつばに差させけり。宗任は、もと賊軍の大將にて、近頃降りし者なれば、義家の家來どもこれを見て、「危きことかな。」かのするどき矢を差さしめ給ふ

ことよ。もし宗任に悪心あらば。
と、手に汗をにぎりけり。

第五 松下禪尼

北條時頼ほうてうときよりの母、松下禪尼、或日時頼を招待せんとして、障子しやうしの破れを手づからつくろひみたり。

禪尼の兄、義景よしかげこれを見て、
「かゝる事は召使に命じ給へ。自ら手を下し給ふに及ばざるべし。」
と言ひしに、

得

「自らなし得ることは、人手をかるまでもなしと思へば。」

とて、なほ前の如く、おぼつかなき手つきにて一小間づつ張りみたり。

義景重ねて、

「さらばことごとく張りかへ給へ。切張はまだらになりて見苦しからん。」
と言ふ。禪尼、



「我も後には張りかへんと思へど、すべて物は破れたる時つくろへば、しばらくはなほ用をなすものぞと若き人に知らせんとて、かくするなり。」と答へぬ。

第六 手まり

良リキウ

寛クワン

かすみ立つ長き春日を子供らと手まりつきつゝこの日くらしつゝ

里

子供らと手まりつきつゝこの里に遊ぶ春日はく

尋國九

れずともよし

天あめも水もひとつに見ゆる海の上に浮かび出でたる佐渡さどが島山

第七 小さなねぢ

暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねぢが、不意にピンセットにはさまれて、明かるい所へ出された。

ねぢは驚いてあたりを見廻したが、いろくゝの物

の音、いろ／＼の物の形が、ごたく／＼と耳にはいり目にはいるばかりで、何が何やらさつぱりわからなかつた。

しかし、だん／＼落着いて見ると、こゝは時計屋の店であることがわかつた。自分の置かれてゐるのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラスの中で、そばには、小さな心棒や、齒車はぐるまや、ぜんまいなどが並んでゐる。きりや、ねぢ廻しや、ピンセットや、小さな槌つちや、さまざまの道具も、同じ臺の上に横たはつてゐる。周囲の壁やガラス戸棚には、いろ／＼な時計が

たくさん並んでゐる。かち／＼と氣ぜはしいのは置時計で、かつたりかつたりと大やうなのは柱時計である。

ねぢは、これ等の道具や時計を、あれこれと見くらべて、あれは何の役に立つのであらう、これはどんな所に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、ふと自分のことに考へ及んだ。

「何といふ小さい情ない自分であらう。あのいろいゝの道具、たくさん時計、形も大きさもそれぞれ違つてはゐるが、どれを見ても大きくて、えらさ

勤

うである。一かどの役目を勤めて世間の役に立つのにも、どれもこれも不足は無ささうである。ただ自分だけが此のやうに小さくて、何の役にも立ちさうにない。あゝ、何といふ情ない身の上であらう。」

不意にぱた／＼と音がして、小さな子供が二人、奥からかけ出して来た。男の子と女の子である。二人はそこらを見廻してゐたが、男の子は、やがて仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。女の子は、たゞじつと見まもつてゐたが、やがてかの小さなね

ぢを見つけて、

「まあ、かはいゝねぢ。」

男の子は、指先でそれをつま／＼としたが、餘り小さいのでつまめなかつた。二度、三度、やつとつまんだと思ふと、すぐに落してしまつた。子供は、思はず顔を見合はせた。ねぢは、仕事臺の脚のかげにころがつた。

脚

此の時、大きなせきばらひが聞えて、父の時計屋さんがはいつて来た。時計屋さんは、
「こゝで遊んではいけない。」

と言ひながら、仕事臺の上を見て、出して置いたねぢの無いのに氣が附いた。

「ねぢが無い。誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。あゝ、いふねぢはもう無くなつて、あれ一つしか無いのだ。あれが無いと、町長さんの懐中時計くわちゆうが直せない。探せ〜。」

ねぢはこれを聞いて、飛上る程嬉しかった。それでは、自分のやうな小さな者でも、役に立つことがあ
るのかしらと、むちゆうになつて喜んだが、此のやうな所にころげ落ちてしまつて、若し見つからなかつ

若

總

たらと、それが又心配になつて來た。

親子は總掛りて探し始めた。ねぢは、「こゝにあま
す。」と叫びたくてたまらない。三人はさんぐ〜探し
廻つたが、見つからないので、
がっかりした。ねぢも、がっ
かりした。

其の時、今まで雲の中にあ
た太陽が顔を出したので、日
光が店一ぱいに差込んで來
た。すると、ねぢが其の光を



受けて、ぴかりと光つた。仕事臺のそばに、ふさぎ込んで下を見つめてゐた女の子が、それを見つけて、思はず「あら。」と叫んだ。

父も喜んだ、子供も喜んだ。しかも、一番喜んだのはねぢであつた。

早速

時計屋さんは、早速ピンセットでねぢをはさみ上げて、大事さうに元のふたガラスの中へ入れた。さうして、一つの懐中時計を出してそれをいぢつてゐたが、やがてピンセットでねぢをはさんで機械の穴に差込み、小さなねぢ廻してしつかりとしめた。

占位

龍頭りゆうづつを廻すと、今まで死んだやうになつてゐた懐中時計が、忽ち愉快さうにかちくくと音を立て始めた。ねぢは、自分がこゝに位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、嬉しくて嬉しくてたまらなかつた。時計屋さんは、仕上げた時計をちよつと耳に當ててからガラス戸棚の中につり下げた。

一日おいて町長さんが来た。

「時計は直りましたか。」

「直りました。小さなねぢが一本いたんでおまし

たから、取りかへて置きました。工合の悪かったのは其のためでした。」
 と言つて渡した。ねぢは、
 「自分もほんたうに役に立つてゐるのだ。」
 と心から満足した。

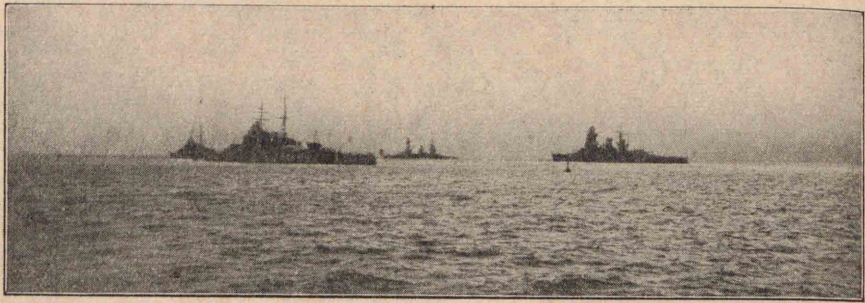
艦

第八 軍艦生活の朝

後

東の空が明かるくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壮大な姿が、だんくにあらはれて来る。後甲板には、當直將校の姿が見え、艦橋には、

望鏡 | 警戒 | 乗員



望遠鏡を持つた掌信號兵しやうしんがうへいが遠くを見張つてゐる。舷門けんもんには、銃を手にした番兵があたりを警戒してゐる。千數百人の乗員は、なほ安らかな眠を續けてゐるのであらう。艦内は深山みやまのやうな静かさである。

人の顔がやつと見分けられるやうになつた頃、時鐘番兵じしょうばんへいがことごとく、と後甲板に来て、總員起し五分前、と、當直將校に報告する。軍艦の起床時刻は、夏

副

は五時、冬は六時である。間もなく、甲板士官や傳令員が起きて来る。副長もはや上甲板にあらはれて、今日の天氣はどうかと空を眺める。

やがて午前五時の鐘かねが鳴ると、當直將校が元氣のよい聲で號令をかける。

「總員起し。」

此の號令で、朝の静かさが忽ち破られ、起床ラツパは勇ましくひびき、傳令員は號笛を吹きながら、總員起し。と呼んで、つり床の間を縫つて行く。すると、乗員は一せいに飛起きて、手早くつり床をくぐる。これ

正

から號令が次々に下る。それにつれて、つり床は正しく一定の場所に納められる。すべての窓や出入口は開かれる。これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具を片付け、雨戸をくると變りはないが、千數百人の乗員が、號令に従つて規律正しく活動する其のさまは、いかにも目ざましい。數分の中に、艦内はすつかり整頓する。

そこで五分間の休憩きうけいがあつて、露天甲板洗となる。これは水兵員の受持で、先づ

「兩舷直、整列。」

露

のラツパが一きは高くひびき渡ると、はだしのまゝの水兵員が後甲板にはせ集つて、ずらりと整列する。兩舷直といふのは、特別の務のある者をのぞいた外の水兵員のことである。間もなく、當直將校から威勢のよい號令がかかる。

「露天甲板洗へ。」

水兵は、くもの子を散らすやうに八方へ散つて、かひなくし



尋國九

毎吐

くズボンをまくり上げ、身輕な姿になつて、分隊毎に甲板洗を始める。先づ下士官が、甲板の吐水口からふき出る海水を、桶に汲んで、はどんく流すと、洗刷あらひ毛けを持つた數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

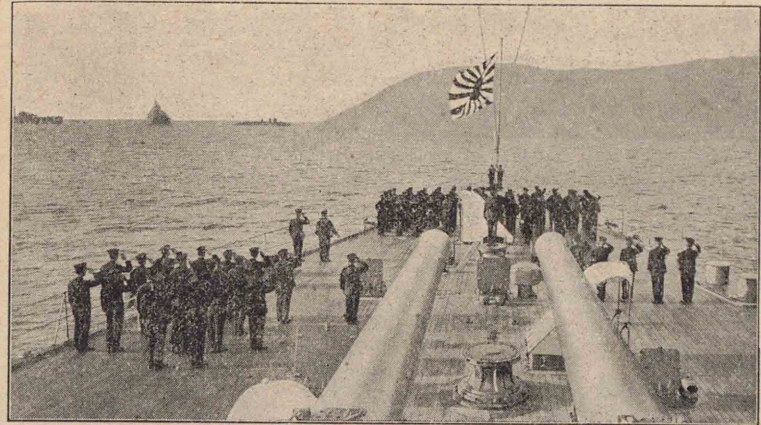
甲板洗がすむと、

「顔洗へ。」「煙草ぼん出せ。」

の號令が下る。そこで始めて乗員は顔を洗ふ。其の中に上陸員が歸艦する。そここゝで「お早う。」が言ひかはされる。火なは一本の煙草ぼんのまはりに

歸

尾 奏 行 姿



は人の山が出来て、いろくの話が出る。笑ひ聲も起る。間もなく「食事」のラツパがひびく。一時間餘りも活動した後であるから、食事のうまいことはいふまでもない。

午前八時になると、艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。「君が代」のラツパが奏せられ、衛兵隊は捧銃の敬禮を行ひ、艦長を始め乗員一同は、皆姿勢を正して軍艦旗に

清

來 臣 價 求

敬禮する。朝日に輝く軍艦旗が、海風にひらめきながら、しづくくと上つて行くさまは、實におごそかである。

軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、これから訓練に取掛るのである。

第九 馬ぞろへ

山内一豊織田信長に仕へて、いまだ日淺かりし頃、或日一匹の良馬を賣りに來れる者あり。信長の家臣等、これを買はんと思へど、價の高きを聞きて、皆求

空欲 貧

めかねたり。一豊は、わけて家も貧しければ、たゞ心に欲しと思ふのみにて、空しく家に歸りぬ。

「さてく、金なければせん方なけれど、あれ程の名馬、武士として手に入れたきものなり。」

とひとり言のやうに言ふを、一豊の妻聞きて、

「其の馬は、いか程の價にや。」

と問ふ。一豊、たゞ

「黄金十兩。」

と答へたるまゝ、腕をこまぬきて又語らず。

「さらば其の馬求め給へ。」

夫

久

とて、妻は鏡箱より小さき一包を取出して、夫の前に差出す。開けば、まばゆきばかりの黄金十兩なり。

一豊

「そもく、これはいかなる

金ぞ。我等年久しく貧に

苦しむたるに、御身は何と

て此の金のあることを今

日まで我に語らざりしぞ。」

となじる。

妻は靜かに答へぬ。



費

「わらは、此の家に参りし時、貧しとて費すことなか
れ、夫の大事あらん時の用にせよ。」とて、父より渡さ
れしは此の金なり。聞けば、近く都にて信長公の
御馬ぞろへのあるよし、定めて自慢じまんの馬に乗りて
集る人々多からん。今こそ君は其の良馬を求め
て、主君のおほめにあづかり給へ。」

志

一豊は妻の深き志しに謝しゃせり。かくて、かの馬は一豊
のものとなりぬ。

やがて馬ぞろへの日は来れり。何れおとらぬ馬
多く集り来れる中に、一きは目立ちてたくましき馬

誰

を、信長、目にとゞめて、

「あつぱれ名馬。誰の馬ぞ。」

と問へば、家臣答へて、

「山内一豊の馬。」

と言ふ。信長、

「日頃貧しと聞きし一豊が、よくもかゝる名馬を求
めしものぞ。見上げたる志。」

としばし感じて止まざりき。

第十 松平信綱のぶつなの幼時

松平信綱は、幼名を長四郎といへり。九歳にして、將軍の若君、竹千代に仕へたり。

長四郎、十一歳の時なりき。或日、竹千代、かなたの御殿の軒端に、雀の巢すずめくひたるを見つけて、

「長四郎、雀の子を取つて參れ。」と命じぬ。

日暮れて後、長四郎、こなたより屋根傳ひに行きて、今や取らんとする時、ふとふみ損じて、中庭にどつと落つ。

燈火

將軍秀忠ひでたか、刀取りて障子しょうじを引きあくれば、御臺所、燈

火取りて出でらる。見れば長四郎なり。將軍、

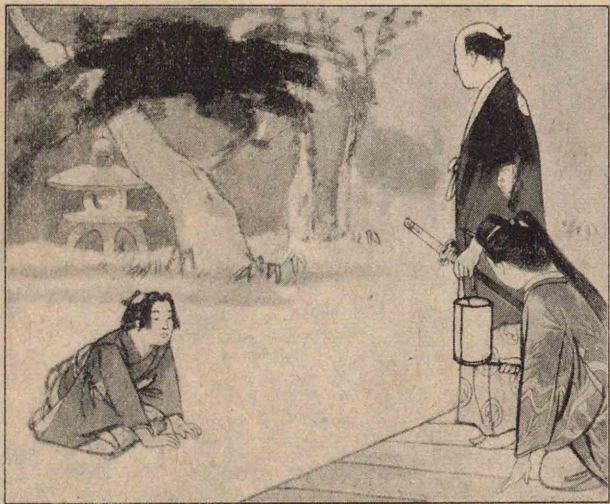
「汝、何しにこゝに來れるぞ。」

「雀の巢くひたるを見て、あまりの欲しさに參りて候。」

「いや、おのれの心にてはあるまじ。誰に教へられて來れるぞ。」

「いな、教へられたるには候はず。」

幾度せめ問はるれども、長四



封

郎の答は初に變らざりき。

「おのれ、ありのまゝに申さざるは不届なり。」

とて、大きなる袋に長四郎を押入れ、口を封じて、

「ありのまゝに申さざる間は、何時までもかくてあるべし。」

とて、袋を柱に掛けられたり。

翌朝、御臺所、長四郎の心をあはれみて、手づから袋を開き、食を與へて、再び封ぜらる。

晝頃、將軍、又長四郎に問はるれども、長四郎つひに言葉を變へず。かたはらより御臺所わび言あり、始

尋國九

めて許されぬ。後にて將軍、御臺所に向かひて、
「彼が今の心にて人とならば、竹千代には無二の忠臣たるべし。」

とて、大いに喜ばれたりとぞ。

◎ 第十一 雀の子

一

茶

雀の子、そのけ、そのけ、お馬が通る

さあござれこゝまでござれ雀の子

赤馬の鼻で吹きけり雀の子

やせ蛙まけるな一茶これにあり

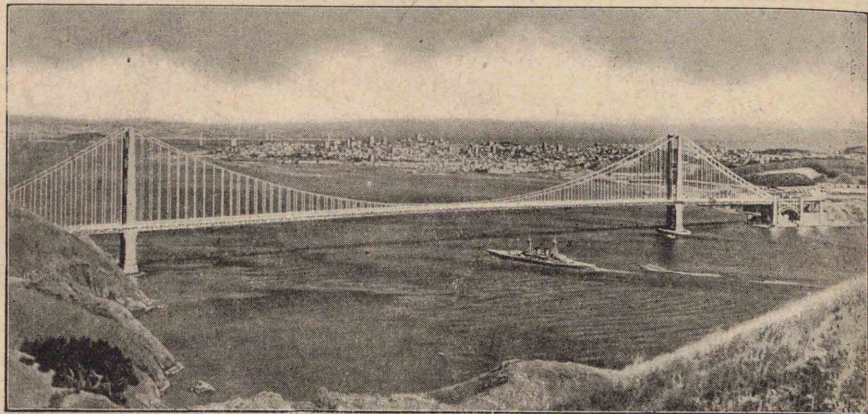
やれ打つなはへが手をする足をする

第十二 アメリカだより

サンフランシスコから

皆さん、元氣ですか。ハワイから出した手紙は、見たでせうね。あれからなほ航海を續けて、五日目の

灣街(灣)



五月二十一日、サンフランシスコに着きました。

船が金門海峽かいかいにさしかゝつて、左右に山を仰ぎながら、一路藍あゐをたゝへたやうな水路を進んだ時は、何となく胸がをどるやうでした。やがて行手に金門橋が水ぎは高く現れ、それを過ぎると眼界が開けて、灣の右手に大市街が見え出しました。大空にそゝり立

建築

つ二十階三十階の大建築、對岸オークランドへ渡す六千九百米のすばらしい長橋、さういふものを見ただけで、あゝアメリカだなど、つくづく感じさせられました。

こゝは、アメリカ合衆國がっしゅうの裏門ともいはれる重要な場所ですから、港や町のにぎやかなことはいふまでもありませんが、又眺望の好いことでも有名です。港から後方の高地へかけて、市街は碁盤ごばんの目のやうに續いてありますから、いたる所、町は急な坂になつてあります。坂町を上つて小高い所に立つときつと港

眺

の景色が、高い建物の間や美しい町の上などに、油畫のやうに見えます。

サンフランシスコには、日本人がたくさん住んであります。ハワイと同じやうに、日本人の子供たちは、アメリカの小學校と日本語學校と、兩方へ通つてあります。今、私が泊つてある旅館も日本人の經營ですが、今年九つになる八重ちゃんといふ女の子は、英語えいごも日本語も非常に上手です。

明後二十五日にこゝを立つて、南のロスアンゼルスへ行くつもりです。

明 經

ロスアンゼルスから

サンフランシスコからロスアンゼルスまでの間は、アメリカ合衆國でも一番景色のよい所だといはれてゐます。左は山、右は海、此の間を汽車はしばしば十數米から二十米ぐらゐの高さの山腹を縫つて走ります。眼下に廣がる太平洋を見渡しながら、あの向かふに日本がある、皆さんに見送つていたゞいた横濱があると思ふと、急になつかしくなりました。ロスアンゼルスは、南國的な都市です。町には椰子の葉が茂り、冬もばらの花が咲くといひます。カ

營

料

リフォルニア州の南部は、日本人が早くから來て農業を營んだ所で、ロスアンゼルスは其の中心地ですから、市内にはりっぱな日本人町があります。日本の書物や、雜誌や、雜貨や、食料品などを賣つてゐるのが見かけられます。美しいのは果物屋で、見るからに、おいしさうな果物が、山のやうに積まれてゐます。軒並みに日本語が聞かれ、日本人の



選題

子供や女の方が、店先でにこ／＼してゐます。

昭和七年の夏、こゝで開かれたオリンピック大会に、日本の選手がめざましい活躍をしたことは、今も町の嬉しい話題になつてゐます。

サンフランシスコでも、こゝでも、私は多くの学校をたづねましたが、きつと日本人の子供の成績のよいことを聞かされて、涙が出る程嬉しく思ひました。しかし、又無邪氣で活潑なアメリカの子供が、教室ではお行儀のよいのにも、すつかり感心しました。皆さんは、お行儀のよいことでも、アメリカの子供に負

けないでせうね。

シカゴから

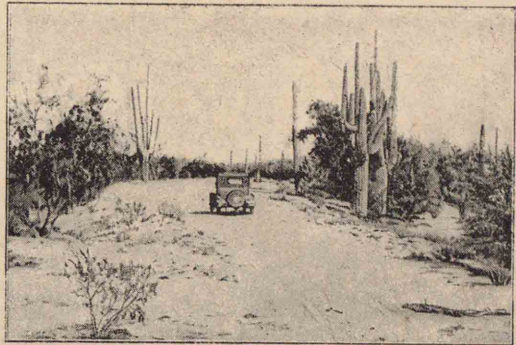
二十九日の朝、ロスアンゼルスを汽車で立つて、夕方、アリゾナ州の沙漠にさしかかりました。此の沙漠は翌日まで續きました。見渡す限り荒涼たる景色でした。たまさか、大きなサボテンがあるくらゐのものです。皆さんは、アメリカ合衆國に、沙漠があるらうなどとは思はなかつたでせう。

しかし、それを過ぎると、全く沃野千里の大平原でした。無限の畠、牧場、森林、さうして、まばらな村落と

荒涼

限牧

湖



幾つかの都市、其の間に、世界第一といはれるミシッピ川が、洋々と流れてゐました。

三日二晩走り続けて、三十一日の夜、シカゴに着きました。

ミシガン湖といふすばらしく大きな湖にのぞんでゐる此のシカゴは、アメリカ合衆國の一大商工都市です。こゝに来ると、もうサンフランシスコの美しさも、ロスアンゼルスロサンゼルスのなごやさもありません。町はいたる所ごつた返してゐま

黒

處(処)

巡

序

す。自動車は、川瀬のやうに續いて走つてゐます。

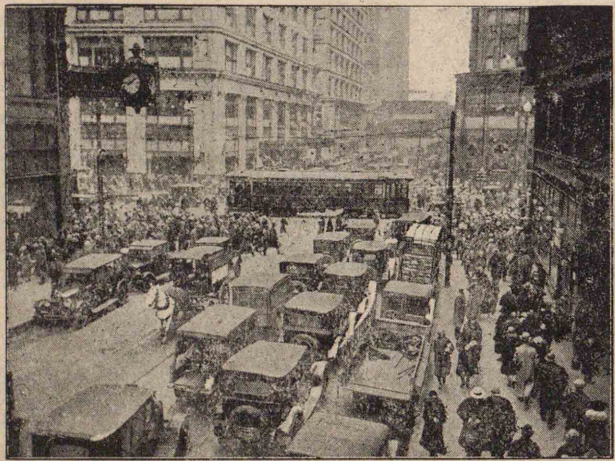
アメリカはどこでも黒人を見かけますが、シカゴに黒人の多いのには驚きました。こゝに有名な屠

殺場さつちやうがあつて、一日に何萬頭と

いふ豚ぶたや牛を處理してゐます

が働いてゐるのは大てい黒人です。廣い場内を一巡する間

に、豚や牛がはだかになり、肉になり、ハムになり、又くわんづめになつて行くのが、順序よく見



殺

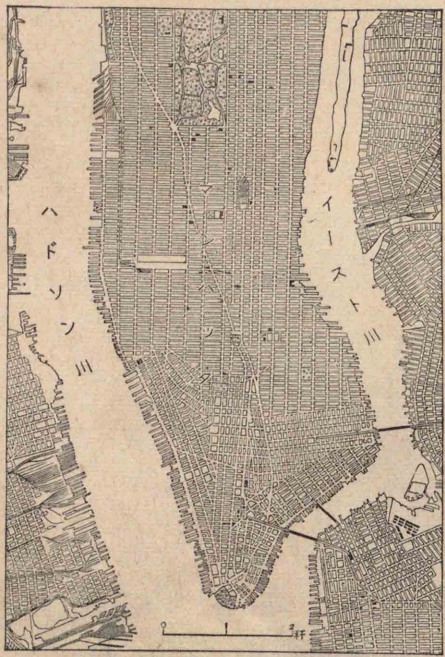
られます。

シカゴは、此の世の地獄だと言つた人もある程般風景な所ですが、今はちやうど新緑の季節で、湖岸の大通や、公園の眺は、さすがに美しいと思ひました。

ニューヨークから

世界第一といはれるニューヨークは、全く高層建築の大都市です。二十階三十階ではもういばれません。五十階七十階から、とうく百階を越えてしまひました。町々を通ると、まるで絶壁の底でも歩いてゐるやうな氣がします。さうして、どこもかし

直 條 等



こも、息づまるやうなさわがしさにぎやかさです。高い建物が、すくくと真直にそびえてゐるばかりでなく、町といふ町は、縦も横も皆直線です。殊に中央のマンハッタンでは、十幾條の縦の大通と、横の無数の通とが、あたかも格子縞のやうに、きちんと交つてゐます。其の横の通は、一つ一つの距離が等しく、通が十二で、ほぼ一軒の割合になつてゐるのださう

です。

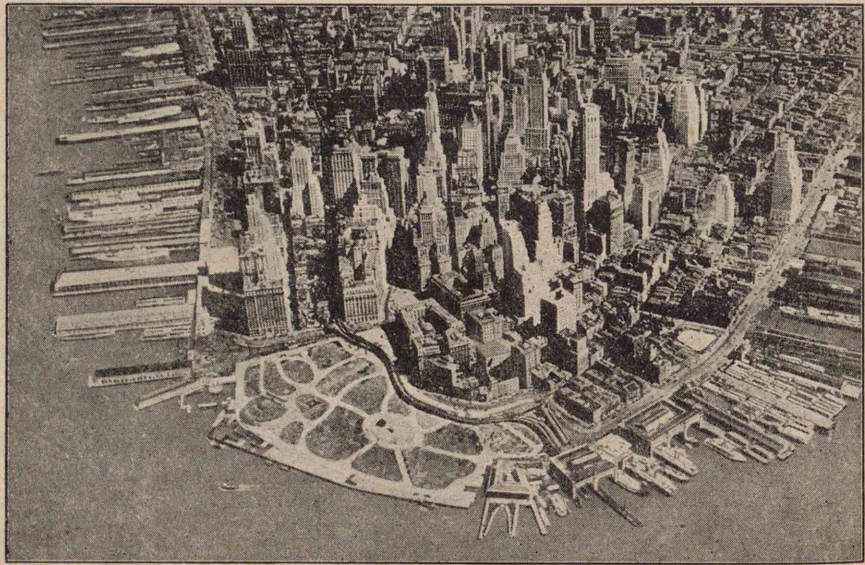
自動車の目まぐるしさはもちろん、地下には地下
鐵道、街上には高架鐵道が、すさまじいひびきを立て
て走つてゐます。其の地下鐵道や高架鐵道までが、
申し合はせたやうに、南から北へ、北から南へと、わき
目も振らず一直線に走つてゐるのですから、考へる
と少々をかしくさへなつて來ます。

高層建築の最上階に立つて眺めたニューヨーク
は、それこそ天下の奇觀です。高い建物が、まるで墓
場の石塔か、記念碑きねんひの林のやうに、よきによきと立

奇

齒

つてゐます。川といふよ
りは海峽といつた方がよ
い程大きなハドソン川と
イースト川とに包まれた
マンハッタンが、あたかも
地圖のやうに見下されま
す。川岸に沿うてぎつし
りと並ぶ埠頭ふとうは、すべてで
一千以上に及ぶさうです
が、それこそ櫛くしの齒どころ



ではありません。水上の船は、風に吹散らされた無数の木の葉にもたとへませうか。此の廣い川を渡す虹にじのやうな橋、對岸のうすもやの中に續く果なき町、なるほどアメリカ合衆國の表門といはれるだけあつて、實に何ともいへない壯觀です。

第十三 佛法僧

「ブツポウソウ」と鳴く鳥のことは、千年の昔から、我が國の詩や歌にうたはれてありますが、其の聲の主がどんな鳥であるかは、最近まで、はつきりわかりませ

佛

詩

森林期

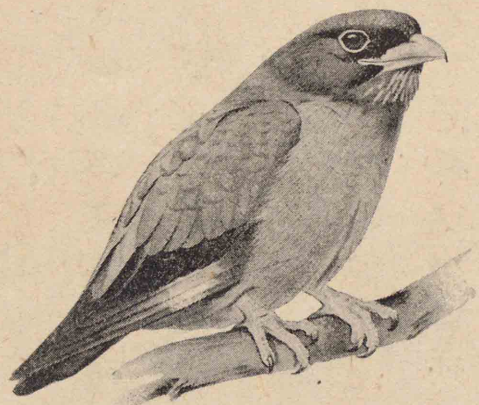
深

んでした。何しろ高野山かうやとか、比叡山ひえいとか、其の外奥深い山の森林で、夜鳴くのです。それに、鳴く時期が大體五六月頃に限られておますから、わからなかつたのも無理ではありません。たゞ、其の聲はいかにも好い聲です。「ブツポウ」又は「ブツポウソウ」と、何回も鳴き續けます。夜ふけた深山のあなたからこなたから、鳴きかはしながら次第に近づいては、又何時の間にか遠ざかつて行きます。それを聞くと、まるで神祕しんぴの世界にでもさまよつてゐるやうな思がします。

濃

色

ところでかういふ深山へ、ちやうど同じ五六月頃、日本では珍しい程美しい鳥が來ます。鳩はとより少し小さいくらゐの大ききですが、全體が濃い綠色で、頭



が黒く、のどと翼と尾とは濃い紫色を帯び、口ばしと脚とは眞赤です。それに、兩方の翼を広げた所を下から見ると、大きな白色の圓い斑紋はんもんがあざやかに見られます。此の鳥が、何時の頃からか、あの

鳥國九

ブツポウソウの聲の主だと思はれるやうになりました。多くの畫家は、此の鳥をゑがきました。さうして、とう／＼これが佛法僧といふ名を付けられてしまひました。

しかし、最近になつて、これを疑ふ人もありました。此の色の美しい佛法僧は、晝の間盛に高い木から木へ飛んで、たゞ「ギヤギヤ」と鳴くのですが、かの「ブツポウソウ」の聲の主は、夜出て鳴きます。夜出て盛に鳴く鳥は、ふくろふのやうに、晝間はかくれて姿を見せないはずです。だから、あの「ブツポウソウ」の聲の主

放

は、どうしても別の鳥であらうといふのです。
 ところで、昭和十年の六月の或夜、ブツポウソウと
 鳴く鳥の聲の實況が、ラヂオで放送され、全國の人々
 が、其の美しい聲を聞きました。すると、あの鳴き聲
 をする鳥なら、自分は飼つてゐる。といふ人が出て來
 ました。さうして、其の飼つてゐる鳥といふのは、あ
 の色の美しい鳥とは全く違つたものでした。手に
 ものせられる程小さい、かはいらしい、みづくのや
 うな鳥で、このはづくといふ鳥でした。
 かうして、千年來不思議がられた聲の主が、始めて

結果鳥彩



はつきりとわかりました。其の結果、いはば我が國
 に二つの名鳥が出來たことになりました。一つは、
 渡鳥として珍しい佛法僧です。其のはでな色彩か
 ら見てもわかるやうに、元來熱帶地方の鳥で、それが
 夏の間だけ日本へ飛んで來るのです。いま一つは、
 見るからにへうきんな顔
 をした、かはいらしいこの
 はづくです。これは非常
 に珍しい鳥といふのでは
 ありませんが、しかし五六

月の頃、ブツポウソウ。」と鳴く聲は、何といつても美しい、深みのある、神秘的な聲です。

第十四 いも掘

五時間目の授業がすむと、先生はにこくして、「今日は、これからじやがいもを掘りませう。皆何時ものやうに、こゝで支度をして、学校園へお集りなさい。」

とおつしやつた。これこそ僕たちが、一週間も前から、毎日々々待つてゐた命令だったので、皆一せいに

舍

小をどりして喜んだ。さうして、大急ぎで学校道具をかばんにしまひ、めいゝく身軽になつて、校舎の後の菜園に集つた。枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畠を、午後の日がかんくと照らしてゐる。

握

當番が、農具小屋から、鋏くはシヤベルなど、いろくゝの道具を出して來た。先生も大きな箱を持つて來て、掘つたいものは此の中へ入れるやうにとおつしやつた。皆は一せいに掘りにかゝる。僕は、割合にしつかりしてゐる一本の莖を握つて、ぐつと引張つた。

盛 大人 絹



やはらかい黒い土が、むくく盛上つたと思ふと、四方へくづれる。中からみづくしい白茶色の玉が、じゆつなぎになつて、ころころと出て来た。大人の握りこぶし程の大きさのもあれば、雀の卵ぐらゐなかはいらしいのもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。隣では、莖がくさつて引抜けのないのを、星野君が根氣よく掘つて、掘つたいもを一

つ一つていねいに並べて行く。

あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、嬉しさうな聲。

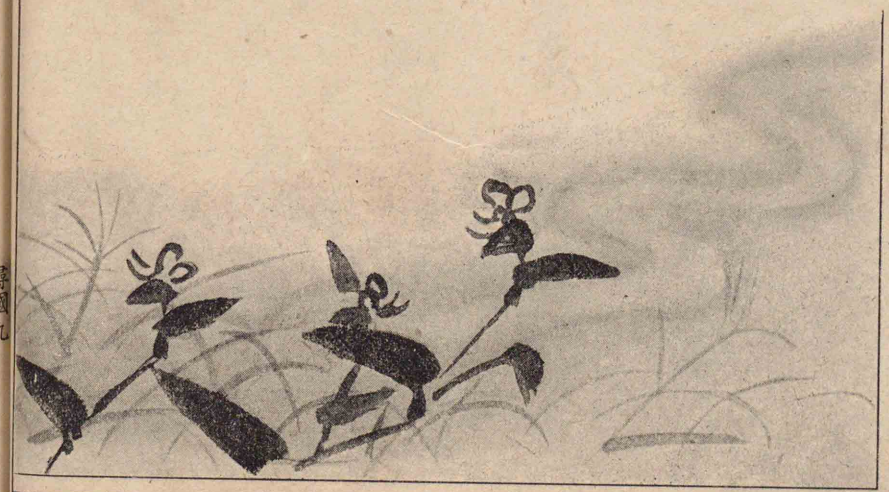
ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、箱のそばへ来て、おもしろさうに、僕等の仕事を見ていらつしやつた。

◎第十五 晴間

さみだれの晴間うれしく、野に立てば

濁

野は輝きて、
 白雲を
 通す日影に、
 はや夏の暑さをおぼゆ。
 行く水は少し濁れど、
 せゝらぎの
 音もまさりて、
 よろこびを
 歌ふが如く、



田

行く我を迎ふる如し。
 田園のつゞく限りは、
 植ゑわたす
 早苗さなへのみどり。
 山遠く
 心はるぐ。
 天地あめつちの大いなるかな。
 ふと見れば、道のほとりに、



つゝましき

姿を見せて

濃き瑠璃るりの

色あざやかに

咲くものは露草の花。

第十六 三日月の影

重代の胃かぶと

甚次郎じんじらうは、兄に呼ばれて座敷へ行つた。見れば、母もそこにゐた。床の間には、すばらしく大きな鹿の

改口祖寶軍

恩

角と三日月の前立との附いた胃がかぎつてある。兄は、改つた口調で言つた。

「甚次郎、此の胃は祖先傳來の寶、これをお前にゆづる。十歳の時、軍に出て敵の首を取つた程強いお前のことだ。どうかりつばな武士になり、家の名をあげてくれ。」

甚次郎は、胸がこみ上げるやうに嬉しかった。

「ありがたく頂戴ちやうたいいたします。」

と言つて頭を下げた。母はそばから言つた。

「それにつけて、御主君あまご尼子家の御恩を忘れまいぞ。」

尼子家の御威光は、昔にひきかへておとろへるばかり、それをよいことにして、敵の毛利がだんく攻寄せて来る。成人したら、一日も早く毛利を討つて、御



威光を昔に返しておくれ。甚次郎の目は、何時の間にか涙で光つてゐた。甚次郎は、此の日から山中鹿介幸盛と

あつた。 甚次郎は、此の日から山中鹿介幸盛と

興

名乗り、心にかたく主家を興すことをちかつた。さうして、山の端にかゝる三日月を仰いで、は、「願はくは、我に七難八苦を與へ給へ。」と祈つた。

一騎討

數年は過ぎた。尼子の本城である出雲の富田城は、其の頃毛利軍に圍まれてゐた。鹿介は、戦つてしばく手がらを立てた。彼の勇名は、味方のみか、もう敵方にも知れ渡つてゐた。敵方に、品川大膳といふ荒武者があつた。彼は、鹿介

者武

を好き相手とつけねらつた。名をたらぎおほかみのすけ榎木狼介勝盛と改め、折もあらば鹿介を討取らうと思つた。

或日のこと、鹿介は部下を連れて、城外を見廻つてみた。川をへだてた對岸から、鹿介の姿をちらと見た狼介は、破鐘われがねのやうな聲で叫んだ。

「やあ、それなる赤絲威せきの甲は、尼子方の大將と見た。鹿の角に三日月の前立は、正しく山中鹿介であらう。」

鹿介は、りんとした聲で大音に答へた。

「いかにも山中鹿介幸盛である。」

狼介は、喜んでをどり上つた。

「かく言ふは石見いほみの國の住人、榎木狼介勝盛。さあ、一騎討の勝負をいたさう。あの川下の洲こそ好き場所。」

と言ひながら、弓を小脇にはさんで、ざんぶと水に飛込んだ。鹿介もたゞ一人、流を切つて進んだ。

狼介は弓に矢をつがへて、鹿介をねらつた。尼子方の秋上伊織あきのすけ介がそれを見て、

「一騎討に、飛道具とは身怯ひけふ千萬。」

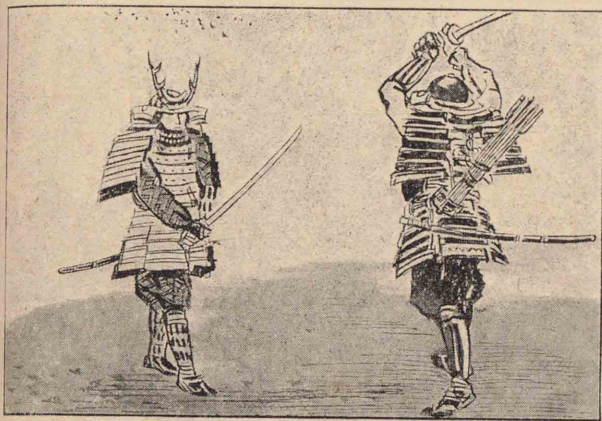
と、これも手早く矢をつがへてひようと射る。ねら

脇 住

甲

違

ひ違はず、狼介が満月の如く引きしぼつてゐる弓のつるを、ふつりと射切つた。味方は「わあ」とはやし立てた。



狼介は怒つて弓をからりと捨て、洲に上るが早いか、四尺の大太刀を抜いて切つてかゝつた。しかし、鹿介の太刀風はさらに鋭かつた。何時の間にか狼介は切立てられて、次第に水際に追ひつめられて行つた。

際 鋭

「めんだうだ。組まう。」

かう叫んで、狼介は太刀を投捨てた。大男の彼は、鹿介を力で仕止めようと思つたのである。

二人はむずと組んだ。しばらくは互に呼吸をはかつてゐたが、やがて狼介は満身の力をこめて、鹿介を投付けようとした。鹿介はそれをじつとふみこたへたが、片足が洲の端にすべり込んで、思はずよろとする。忽ち狼介の大きな體が、鹿介の上のしかゝつた。鹿介は組敷かれた。兩岸の敵も味方も、思はず手に汗を握る。

刃

とたん、鹿介はむつくと立上つた。其の手には、血に染まつた短刀が光つてゐる。狼介の大きな體は、もう鹿介の足もとにぐたりとしてゐた。

「敵も見よ、味方も聞け。現れ出た狼を、鹿介が討取つた。」

聲

鹿介の大音聲は、兩岸にひびき渡つた。

盡
盡

其の後幾度か烈しい戦があつた。さしもの敵も、此の一城をもてあましたが、前後七年にわたる長い籠城に、尼子方は多く戦死し、それに糧食りやうじよくがとうくく盡きてしまつた。城主尼子義久よしひさは、涙をのんで敵に

降つた。富田城には、毛利の旗がひるがへつた。

一 苦節

散
舊
旧

尼子の舊臣は、涙の中に四散した。鹿介は、身をやつして京都へ上つた。

戦國の世とはいへ、京都では花が咲き、人は蝶てふのやうに浮かれてゐた。

再

其の中に、尼子の舊臣が追々京都に集つて來た。彼等は、鹿介を中心として、主家の再興をくはだてた。其の頃、京都の或寺に、人品のよい小僧さんがゐた。さうして、それが尼子家の子孫であることがわかつ

脱

た。鹿介は此の小僧さんを主君と仰いだ。

「尼子家再興のことは、我が年来の望である。」

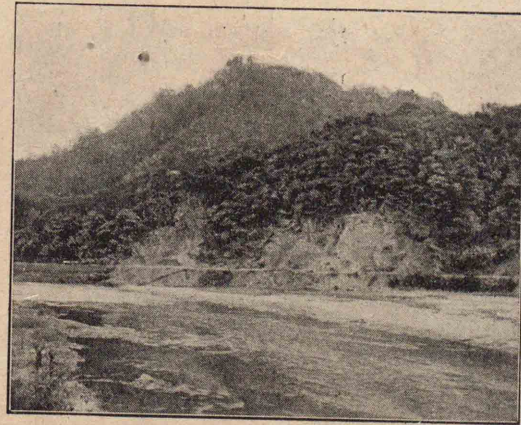
小僧さんは雄々しくもかう言つて、ころもを脱捨て、尼子勝久と名乗つた。

時は来た。永禄十二年六月の

或夜、勝久を奉ずる尼子勢は出雲に入り、一城を築いて三度ときの聲を作つた。

此の聲が四方に呼掛けでもし

たやうに、今まで敵に附いてゐた舊臣が、續々と勝久



の所へ集つた。諸城は、片端から尼子の手に返つた。しかし、富田城は名城であるだけに、中々落ちさうになかつた。

其の間に、毛利の大軍がやつて来た。輝元を大將

とし、吉川元春、小早川隆景を副將として、一萬五千の精兵が堂々と進軍して来た。

富田城がまだ取れないのに、敵の大軍が押寄せたのでは、味方の勝利がおぼつかない。しかし、鹿介は腹をきめた。すべての軍兵を率ゐて、富田城の南三里、布部山に敵を迎へ討つた。味方の軍は約七千で

率兵 利

倍 新 枕

あつた。

まことに死物狂ひの戦であつた。敵の前軍はしばしばくづれた。しかし、何といつても二倍以上の敵である、新手は後から後から現れる。さしもの尼子勢もへとくへに疲れ、多くの勇士はむぎんや枕を並べて討死した。

勝誇つた敵の大軍は、やがて出雲一國にあふれた。勝久は危くのがれて、再び京都へ走つた。

上月城かうづき

それから又幾年か過ぎた。鹿介は、織田おだ信長のぶながに毛

利攻めの志があることを知つて、彼をたよつた。鹿介を一目見た信長は、此の勇士の苦節に同情した。

「毛利攻めの御先手に加り、若し戦功がありましたら、主人勝久に、出雲一國を頂きたくございます。」鹿介の血を吐く言葉に、信長は大きくうなづいて見せた。

遂に再び時が来た。尼子の残黨ざんたうは、秀吉ひてよしの軍勢に加つて、毛利攻めの先鋒せんほうとなつた。

いち早く播磨はりまの上月城を占領して、こゝにたてこもつた二千五百の尼子勢は、程なく、元春・隆景の率ゐ

頼援

る七萬の大軍にひし／＼と取圍まれた。

秀吉の援軍が今日来るか明日来るか、それを頼みに勝久は城を守つた。毛利方の大砲を夜に乗じてうばひ取つて、味方は一時氣勢をあげた。

しかし、援軍は敵にはゞまれて近づくことが出来なかつた。七萬の大軍に圍まれては、上月城は一たまりもない。弓折れ矢盡きて、勝久はいさぎよく切腹することになつた。

「いたづらに朽果てたかもしれぬわたしが、出雲に旗あげして、一時でも其の領主となつたのは、全く

朽

謝

お前のかであつた。」

勝久は、かう言つて鹿介に感謝した。

鹿介は、男泣きに泣いて主君におわびをした。しかし、彼はまだ死ねなかつた。尼子重代の敵毛利を、せめて其の片われの元春を、おのれ其のまゝにして置けようか。七難八苦は、もとより望む所である。鹿介は主君に志を告げ、許をこゝうてわざと捕はれ的身となつた。

捕告

甲部川かふべの秋

鹿介は西へ送られた。

面

こゝは備中の國甲部川の渡
 してある。天正六年七月十七
 日、秋とはいへ、まだ烈しい日光
 が、じり／＼と照りつけてある。
 川端の石に腰かけて、來し方
 行末を思ひながら、鹿介はじつ
 と水の面を眺めた。つばめが、
 川水にすれ／＼に飛んでは、白い腹を見せてちう返
 りをしてゐた。

とつぜん後から切附けた者がある。鹿介は、それ



華國九

伏カ

が敵方の一人河村新左衛門であると知るや、身をか
 はして、ざんぶと川へ飛込んだ。新左衛門も飛込ん
 だ。二人はしばし水中で戦つたが、重手を負ひなが
 らも、鹿介は大力の新左衛門を組伏せてしまった。
 すると、これも力自慢の福間彦右衛門が、後から鹿介
 のもと／＼りをつかんで引倒した。

七難八苦の生涯は、三十四歳で終を告げた。

甲部川の水は、此のうらみも知らぬ顔に、今もい
 うと流れてゐる。月毎にあの淡い三日月の影を浮
 かべながら。

圖

第十七 圖書館

七月になつて、夜の空に星が美しく見えるやうになつた。僕は、此の間から星のことを知りたと思つて、父の本箱を見たが、星の本は一冊も無い。

「圖書館へ行けば、幾らもあるだらう。」と、父は言つた。

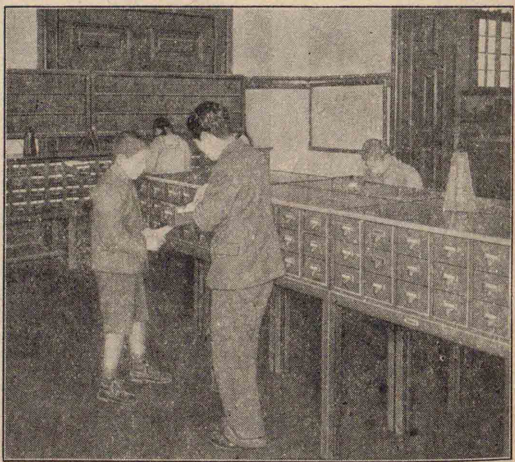
今日は日曜日なので、僕は朝から圖書館へ出掛けた。其の大きな建物が見えると、僕は暑いのも忘れて、急ぎ足になつた。

華國九

録目

入口で閲覧用紙をもらふ。 目錄室へはいると、急に汗が流れ出した。

目錄は、たくさん箱にはいつたカードである。皆が、それをしらべては用紙に書入れてある。しかし、餘りカードが多いので、僕はどれを見てよいか迷つた。すると、掛の人がそばへ来て、「どんな本が讀みたいのですか。」と言つた。



「星の本です。」

「あ、それなら、天文学といふ見出しのある所を見るのです。」

かう言つて、掛の人は其のカードを教へてくれた。僕は嬉しかった。

「しかし、天文学のカードもずあぶん多い。そこで僕は又迷つた。すると、

「これが好いでせう。」

と、一枚のカードを指して其の人は言つた。どこまでも親切な人だ。

庫

姓

「ありがたうございます。」

とお禮を言つて、僕は其のカードの本の名と番號を、用紙に書込んだ。

それを出納掛すゐたふへ持つて行くと、すぐ書庫へ送られる。間もなく、出納手が、たくさんの本をかゝへて書庫から出て来た。出納掛の人が、一々姓名を呼んで本を渡す。急に、

「中村さん。」

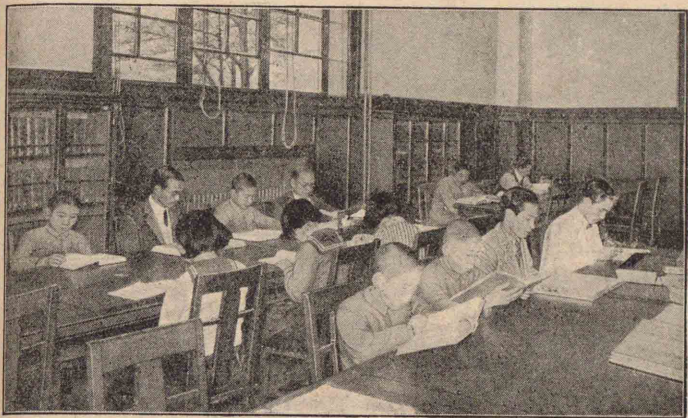
と、僕の名が呼ばれた。はつとしながら思はず、
「はい。」

と、大きな聲で返事をしたので、出納掛の人は笑ひながら本を渡してくれた。

「閲覧室へ行つた。」

天井てんじやうの高い、廣々とした室は、しんとして静かだ。しかも中には大勢の人があて、熱心に本を見てゐる。僕も、出来るだけ音を立たないやうに行つて、あいてゐる席に腰掛けた。

「間もなく、僕の心は、本の中の月



本 史 歴

や星の美しい世界へ飛んで行つた。どれだけの時間かたつたらう。少し疲れたので頭を上げて見廻すと、今まで少しも氣がつかないであたが、松本君がずつと向かふの席にある。そつと行つて、軽く背中をたたく。松本君は、びつくりして僕を見上げた。

二人で休憩室きゆうけいしつへ行つた。

「君、始めて来たね。」

「うん。」

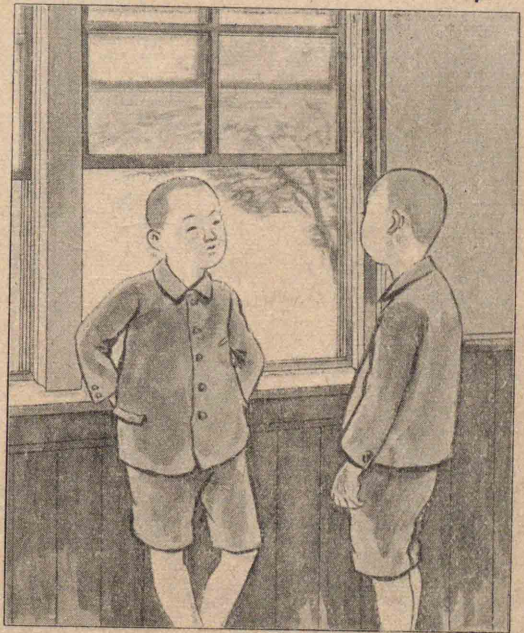
「僕は、土曜か日曜には大てい来てゐる。讀みたい

本が山程あるよ。君も、これから度々来るといふ。

「夏休になつたら、僕もきつと来る。」

窓の外には、楓かへての枝が

そよ風に動いてゐる。さうして、まぶしい程照りつける日を浴びて、日まはりや、ほうせん花や、松葉ぼたんの美しく咲いてゐるのが、其の枝越しの庭に見られた。



第十八 星の話

晴れた夜空を仰ぐと、たくさん星が、まるで寶石をちりばめたやうに美しく輝いてゐます。ちよつと見たところでは、ほとんど無数と見えるこれらの星にも、名前や番號があり、位置もきまつてゐるので、すがた、ぼんやり見てゐるだけでは、一體どれがどうなのか、さつぱり見當が付きません。

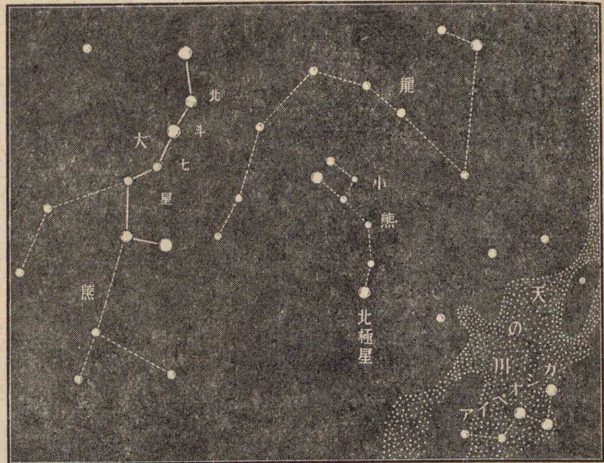
そこで、先づ真北へ向かつて立つて見ませう。北の空にもたくさん星がありますが、其の中で一つ

北

大事な星があります。地平線から次第に見上げて、頭の真上まで行く途中、真中邊より少し低い所に、かなり大きな星が一つ見えるのがそれです。もつとも其の高さは、見る場所によつて幾分違ひます。北の北海道でしたら、ほんま真中邊ですが、反對に南の沖繩や臺灣でしたら、ずっと低くなります。

しかし、かう言つただけでは、まだ中々見當が附かないでせう。さうしたら、どこか其の邊の空に、柄杓のやうな形に連なつた、美しい七つの星を探すことにしませう。これはすぐ見つかります。七月の中

斗星 旬



旬ですと、夜九時頃、北より少し西へ寄つた方に、枡ますを下に、少し曲つた柄えを上えに、ちやうど柄杓を立てたやうなかつかうになつてゐます。此の七つの星を北斗七星といひます。

北斗七星が見つかつたら、其の七つの中の、下の端に當る二つの星に注意しませう。さうして、かりに此の二つの星を結ぶ線を引き、それをなほ右の方へのばして見ませう。すると、此

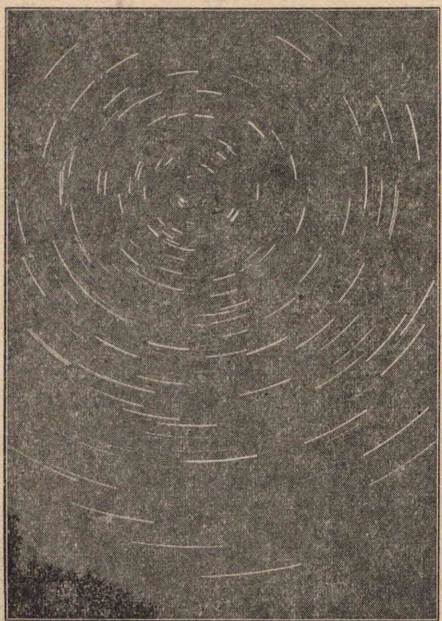
極

の二つの星の距離きよりの五倍ばかりの所に、きつと一つの星が見つかります。さつき探さうとしたのがこれ、北極星といふ星です。

北極星は、何時見てもほぼ真北にある星ですから、夜道に迷つた時など、此の星を見つければ、すぐ方角を知ることが出来ます。昔から航海の目當となつてくれたのは、此の星です。

ところで、大空の外の星は、時刻によつてかなりあり場所が變つて行きます。今どれか一つの星を、東にさし出た軒端にすれくりに當てて、下からじつと

寫真



見てみますと、やがて其の星は、軒端にかくれて見えなくなります。つまり星は、西へく移つて行くのです。日や月が東から出て西へはいるやうに、星も大體東から出て西へはいるのです。

星の動き方をもつとくはしく調べて見ますと、北の空では、星が北極星をほぼ中心に、圓を廻がいて動いてゐるのだといふことがわかります。寫真機を北極星に向け

更 覺

て、一時間ぐらゐふたをあけて置くと、此の圓をゑがく様子がわかるやうに寫真にうつります。それだけでなく、夜九時に北斗七星を見て其の位置を覚え、更に十時十一時に見ると、此の動き方が大てい見當がつきます。さうして、北極星の近くに見える星程小さい圓をゑがき、遠くに見える星程大きい圓をゑがきます。

しかし、かういふ風に星が動くといふのも、實は我の住んである地球が廻るから、さう見えるだけのことですが、今の場合、それを考に入れないうで置きま

球

せう。

さて、此の北極星や北斗七星を目當にして、其の附近を見ると、いろくの星の列があります。先づ北斗七星と其の附近にある幾つかの星を加へて、おほぐま大熊座といひますが、それは昔の人が、それらの星の列に大きな熊の形を考へたからです。又北極星を柄の端にして、北斗七星とどうやら似た、小さい柄杓形に連なるのを、大熊座に對して小熊座といひ、小熊座と北斗七星との間に尾を入れて、小熊座を包むやうに、のろくと曲りくねつて連なる十ばかりの星を龍りゅう

座といひますが、どちらにも星があまり大きくありませんから、よく氣を付けて見ないと、はつきりしません。それよりも、北極星の右下の方に、椅子いすの形に連なる五つばかりの星はカシオペア座で、俗にいかり星とも山形星ともいひますが、これははつきりしてゐますから誰でもすぐ見つけます。さうして、此の邊、北から南へかけて、天あまの川が、夏の夜空に銀の砂子を美しくまき散らしてゐるのが見られます。

第十九 京城へ

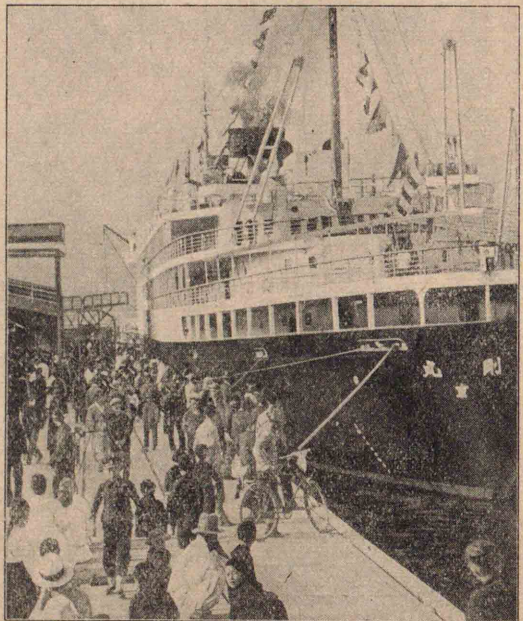
連絡船れんらくせんは朝早く釜山ふせんに着いた。京城行の汽車が目の前に待つてゐる。兄と私は並んで席を取つた。前の席には朝鮮服てうせんを着た人が腰掛けた。さうして、

「どちらへいらつしやいますか。」

と、私たちに話しかけた。

「京城へまゐります。あなたは。」

「私は京城で乗りかへて、元山げんざんへまゐります。」



刺 沿

兄は其の人と早速仲好しになつて、話し合つてある。もらつた名刺には金子俊泰としやすとあつた。

沿道の景色は内地とは大分變つてある。近くの山々は岡と言ひたい程低くなだらかである。ならやくぬぎを交へた松林がどこまでも續く。下草の茂りはあまり深くないので、所々に地面の赤い色さへあらはれてある。いたる所水田がよく開けて、稲が青々とのびてある。其の間を汽車はすさまじい勢で走る。

山のふもとや、小高い岡のそばに村が見える。家

は、みんな藁わらぶきで小さい。ひよろひよろとのびたポプラの下の一けん家、垣根にかけた白い干し物、赤い土の色などを見ると、なるほど朝鮮だなどいふ感じがする。

大邱たいきゅうを過ぎてしばらく行くと、次第にのぼりになる。

「秋風嶺しゅうふうりやうを越えるのです。蔚山うるさんから京城へ向かふ旅客機は、こゝが一番難所ださうです。」

金子さんが説明してくれる。

此の列車は特別急行で、途中の驛にはほとんど止

らない。驛名を讀むひまもなく通り過ぎてしまふ。驛員の顔が見えたと思ふと消え、驛の花壇くわたんの赤いカ
ンナの花が後へ走つて行く。



ある。

もう晝近い頃であらう。大田たいてん
を過ぎた。強い太陽の光が、山に
畠に、ぎらくと照りつけてある。
車内も中々暑い。窓をあけ放し
て風を入れる。麻の着物を着た
人が、油紙の扇をゆつたり使つて

麻

尉古役

「廣い道路が、鐵道と並んで通つてある所が多い。
並木がよく植込まれてある。荷物を積んだ小さい
朝鮮馬が行く。並木の日かげに大きい包を頭の上
にのせた女が、休んで汗をふいてある。時には砂ば
こりをあげて自動車も走る。」

旅行案内を見てみた兄が、

「今過ぎた驛は成歡せいぐわんだよ。明治二十七八年戦役の

古戦場だ。」

「さうです。松崎まつざき大尉の碑ひもあるはずです。」

金子さんの指さす方を立上つて見たら、岡の青葉が

くれに、それらしいものが見えた。

水原すゐげんを過ぎる。

見渡す限り水田が續いて、青々とした稲が勢よくのびてゐる。暑い日盛りにあつちでも、こつちでも、田の草を取つてゐる。草取の手をやめて、こつちを見てゐる子供もある。

「もう京城ですよ。今通つた南京城みなみやけいしやうから四つ目が京城驛です。」

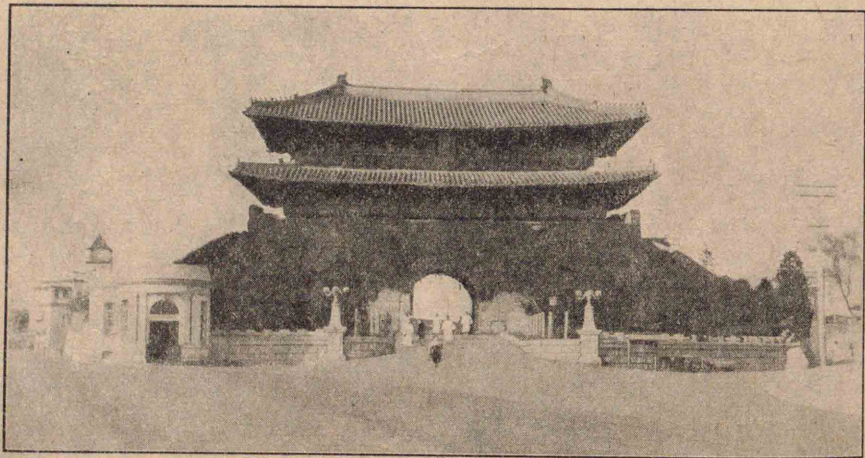
「もう京城ですか。釜山から四百五十軒を、七時間もかゝらないで走つたわけですね。」

「さうです。」

「ではお別れですね。いろいろ、お世話になりました。」

兄と金子さんが話し合ふ。

汽車は、すさまじい音を立てて、漢江かんかうの鐵橋を渡つた。江岸の建物が、強い夏の光を受けて、きら／＼と光つてゐる。汽車は、もう京城の市中を走つてゐるのだ、家々の間を。



第二十 僕の子馬 (岩手縣のなみの小俣)

北斗は僕の子馬です。

生まれたのは、去年の春、ちやうど櫻の花の咲く頃でした。僕が學校から歸ると、父はにこ／＼しながら、

「新一、子馬が生まれたよ。」

と言ひます。それを聞くと、僕はむちゆうになつて馬屋へかけこみました。見ればうす暗くしてある馬屋の奥の方で、母馬が、生まれたばかりの子馬をし

牝牡

きりになめてやつてみました。父も後から來たので、僕が、

「おとうさん、子馬は牡ですか、牝ですか。」

と尋ねますと、父はさも得意さうに、

「牡さ。」

と言ひます。

「ちやあ、今度の子馬は僕に世話をさせて下さい。」

父はしばらくだまつてみました。

「うん、おぢいさんによく指圖していたゞいて、一つ一生けんめいにやつて見るか。」

と許してくれました。

僕は嬉しくてたまりません。早速其の事を祖父に言ひますと、祖父も、

「ほう、お前が世話をしようといふのか。よからう。一つやつてごらん。細かい事はだん／＼に話してあげようが、第一は馬をよくかはいがつてやることだ。日本の馬は氣が荒いとかいはれるさうだが、それも馬が悪いのではない、扱ふ人がいけなから、馬に悪いくせが附いてしまふのだ。親切にしてやれば、馬程すなほで利口なもののはめつた

にないぞ。」

と教へてくれました。

子馬の名は北斗ときまりました。一週間ばかりたつて親子とも馬屋の外へ出しますと、北斗は、おくびやうさうな目つきをして、始めて見る世界をさも珍しさうに眺めました。大きな犬ぐらゐの大ききさで、肢はばかにひよろ長く見えます。さうして、ともすると母馬にすり寄つては、乳を吸つてばかりあます。其のかはい、様子は今でも忘れません。

日がたつにつれて、だん／＼僕になれて來ました。

時には乳をのむのも忘れて、ひよる長い肢で、元氣よく草原の上をはね廻ることもありました。

六月になると、母馬につけて近くの牧場へ放牧にやることになりました。僕は、せつかくなれて来た北斗を、手もどからはなすのがいやでしたけれども、さうしないと、子馬が丈夫にならないのです。で、僕は、其の頃學校から歸ると、すぐ牧場へ行つて見ました。牧場には、村のあちこちから同じやうな子馬がたくさん来て居て、母馬の草をたべる後を追ひながら、廣い野原を楽しさうに遊び廻つてゐました。

忙

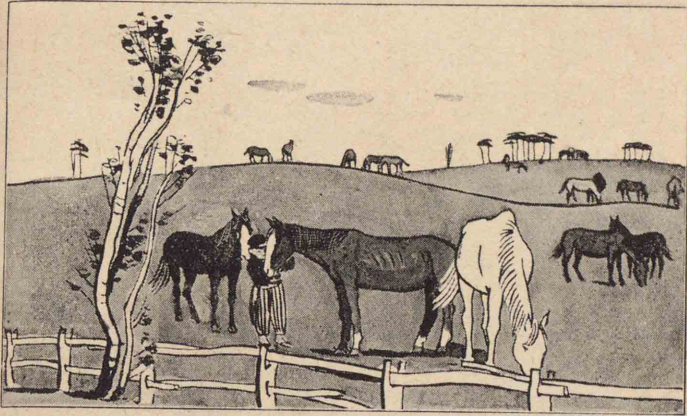
放牧に出してから、北斗の體はめき／＼丈夫になりました。肢もしつかりして來ました。さうして、長い夏も過ぎ、秋が來て、野山の草木が枯れる頃、五箇月ぶりであちの馬屋へ連れて歸りました。

いよく、北斗は、乳をはなれるやうになりました。體の手入れをしたり、運動をさせたり、僕の仕事が追追忙しくなつたのは、其の頃からです。しかし、それだけに、かはいさも一そう深くなつて來ました。

寒い冬の日でも、一日に一度は、必ず北斗を連れて運動に出かけました。僕がかけ出せば、北斗もかけ

出し、僕が止れば北斗も止り、追つたり追はれたりしながら、楽しく運動しました。

二歳駒にさいごまになつて、北斗もめつきり馬らしくなりました。今年も六月から放牧に出しましたが、去年と違つて、僕が行くと、北斗は嬉しさに、すぐ僕の所へ飛んで来て、鼻をすり附けます。手のひらに鹽をのせてやると、うまさうになめます。僕が唱歌を歌ふと、北



歌唱 鹽(塩)

斗は、何時までもおとなしく草をたべながら、僕のそばで遊んでゐます。

何時の頃からか、北斗は、清君のうちの子馬の青と大そう仲好しになりました。僕のない時は、何時でも青と遊んでゐるやうでした。

九月に二歳駒の市が始るといふので、八月に北斗をうちへ連れて歸りました。

北斗は、ほんたうに利口で、すなほです。教へることとは何でもよく覚えるし、毛櫛けぐしで手入れをしたり、肢をあげさせて蹄ひづめの裏をさうちしたりしても、じつと

おとなしくしてゐます。物に驚いてかけ出さうとするやうな時でも、「ほうく」と聲をかけて、手のひらで軽く首や背中をなでてやると、すぐ安心して静まつてしまひます。此の間も祖父が言ひました。

骨

「お前がよくめんだうを見てやつたから、北斗はりつばな二歳駒になつた。此の村に二歳駒もたくさんあるが、北斗程見事なのは見かけないやうだ。幅もあるし、骨組も丈夫になつた。」
僕は祖父の此の言葉を聞いて、ほんたうに嬉しいと思ひました。

二歳駒の市が始れば、いよく北斗と別れなければなりません。一年半も手しほにかけた北斗としよに居るのも、後幾日もないと思ふと、僕は泣きたい程つらい氣がします。けれども、北斗は、きつと軍馬に買上げられるに違ひありません。さうして、りつばな乗馬になり、軍人さんを乗せて、意氣揚々と歩いてせう。其の勇ましい様子を思ひ浮かべると、僕は北斗のために喜んでやりたいのです。

第二十一 母馬子馬

柳夕

母馬子馬

沼ぬまの岸

夏の夕の柳かげ。

母が番して

子の馬は



ゆつくりゆつくり水を飲む。

圓く廣がる

水の輪が、

いくつも出ては消えるたび、

水にうつつた

三日月が、

ゆらく見えたりかくれたり。

母馬子馬

沼の岸

柳のかけが暮れて行く。

第二十二 秋のおとづれ

秋は蟲の聲から始る。

暖 歎
晝間は、まだ暑いくゝの歎聲が口をついて出て來る。眞夏の暑さは誰も覺悟かくごをしてゐるが、八月木から九月の初めもなかばを越せば、どこかに秋らしいものが見えてもよささうなものである。それなのに、寒暖計は三十度

河

を越えたがる。暑さはもうたくさんだと言ひたくなる。すると或日の午後、裏山の森で、ツクく〜ポウシ、ツクく〜ポウシの聲を聞いた。

暑い日がやつと暮れても、よひの間は家の中がむつとして、柱も壁も、さはるとどうやら熱氣を吐いてゐる。二階へ上つてみても、さして涼しい風はなささうである。たゞ晴れた夜空に星がきら〜とさえ、銀河があざやかに中天にかゝつてゐる。其の時ふと耳にするものは、前の草原で鳴く蟲の聲である。それが果して何蟲であるか、はつきりはしないが、か

なり多数の聲であることを感ずる。夜がふけると、思ひなしか屋根瓦が少ししめつて来る。

夜の燈火をしたつて来る蟲は、蛾や、こがね蟲や、羽蟻ありが多く、どれもこれも、たゞうるさいだけであるのに、どこからかかすかに羽音がして、障子しやうしに軽くばさと止つた蟲が、やがて「スイツチヨ、スイツチヨ」をくりかへす。此のくらゐあいきやうのある氣のきいた蟲は、めつたにないものだ。さうして、それが、しきりに「秋だ、秋だ」と鳴き立てるやうに思はれる。

もう何といつても秋である。よし晝間はどんな

床

に暑からうとも、日光はかすかに黄色味を帯びて、壁や塀の強い反射が幾分やはらいで見える。梢吹く風が、思ひ出したやうにざわ／＼と音を立てる。背戸のみぞ端に、秋海棠しうかいだうがかはいらしい、淡紅色の花をつける。畠はらの韭にらの花に、頭でつかちないちもじせゝりが飛びちがふ。何よりも、たんぼに早稲わせの穂ほが出揃つて、白く波打つのが、秋らしく見渡される。

やがて二百十日が来て、農家はたゞ風ばかりを心配する。夜は、そろ／＼こぼろぎが家の中へはいつて、床の下や壁の中で聲高く鳴き立てる。

第二十三

袴垂はかまだれ

歩

昔、袴垂といふぬす人ありけり。着物をはぎ取らんとて、或夜、町はづれに出でて人の来るを待ちゐたるに、身分いやしからざる人、あたゝかけなる着物着て、笛を吹きながら歩み來れり。

「よき獲物えものかな」と、直ちに飛びかゝらんと思へども、其の人の餘りに落着きたるに氣をのまれて、近寄りがたし。後より従ひ行けども、其の人少しも氣に止むる氣色なし。わざと足音を立てて走り寄れば、笛

幸國九

を吹きながら靜かに見かへる。ますく氣おくれして、をどりかゝらんやうもなく、たゞ元の如くに従ひ行く。



十町程も行って、いよく心を決し、刀を抜きて切りかゝれば、此の度は笛を吹止めて、ふりかへり、「何者ぞ。」と言ふ。其の一聲に身のちゝむ如く覺えて、思はず

地にひざまづく。再び、

「何者ぞ。」

と問はれて、

「ぬす人の大将袴垂。」

とふるひながら答ふ。

「聞きたることもある名なり。我につきて來れ。」

と言ひて、又前の如く笛を吹きて行く。

今は逃ぐることもかなはず、恐るゝ後に従ひて

其の家に至る。何人かと思へば、其の頃武名かくれ

なき藤原保昌ふちはらのちやまきなり。保昌は家に入り、綿入一枚取出

至

業

して袴垂に與へ、

「これを取りて行け。よからぬ業して、人を苦しむることなかれ。」

と言聞かせたり。

其の後、袴垂此の時の事を人に語りて、

「これ程恐しかりしことなかりき。」

と言ひたりとぞ。

第二十四 ひざ栗毛

一 小田原の宿

彌次郎やじらうと北八は江戸を立つて、東海道を歩いたり、かごに乗つたり、馬に乗つたりしながら、二日目の夕暮に、小田原に着きました。

宿を取つて、わらちをぬぎ足を洗つて、座敷へ通りました。間もなく女中が来て、風呂ふろの案内をしました。

「北八、お前先へはいれ。」

と、彌次郎が言ひました。よし来たとばかり、北八が手ぬぐひを下げて風呂場へ行つてみると、今まで見たこともない妙な風呂です。湯の上に圓い板が浮

踏

いてあります。それを踏沈めてはいるのですが、北八は、ふただらうと思つて取りのけました。さうして、風呂へ片足を入れて、びつくりしました。底は鐵のかまです。

「あつゝゝゝ。これはとんでもない風呂だ。」

しかし、聞くのもめんだうだと思つて、あたりを見廻すと、庭に下駄げたが一足置いてあります。これ幸と、其の下駄をはいて風呂にはいりました。

北八は、氣持好ささうに歌を歌ひ出しました。だが、長くつかつてみると、底の方が熱くなつて來

熱

ました。立つたりすわ
つたり、下駄ばきのま
で、がたく踏んでゐま
すと、とつぜん底が抜け
て、湯はすつかり流れ出
てしまひました。



變

「やあ、助け船。大變々々。」

此の聲を聞きつけて、彌次郎も宿の主人も、飛んで
出て來ました。

「どうした、どうした。」

「どうなさいました。」

「いや、命だけは無事だが、風呂の底が抜けて、
主人はびつくりして、

「どうして又底が抜けました。」

「つい下駄でがたくやつたので。」

「いや、此の人はとんでもないお方だ。下駄ばきで
風呂へはいる人があるものですか。」

二 大井川

二人は駿河の大井川まで來ました。今日は水が
多いので、連臺でなくては越せないといふことです。

彌次郎は人夫に聞きました。

「一體幾らで渡す。」

「お二人で八百文下さい。」

「高いく。もうお前たちの世話にならぬ。」

と、足早に通り返して、彌次郎は北八に言ひました。

「お前の脇差を貸してくれ。」

「何にするのだ。」

「かうして武士になるのだ。」

北八の脇差を取つて差し、自分の脇差は、鞘袋さやぶくろをずらして長い刀のやうに見せかけました。

合 都

「どうだ、これで大小を差したりつばな武士に見えるだらう。お前はお供だ。ついて来い。」

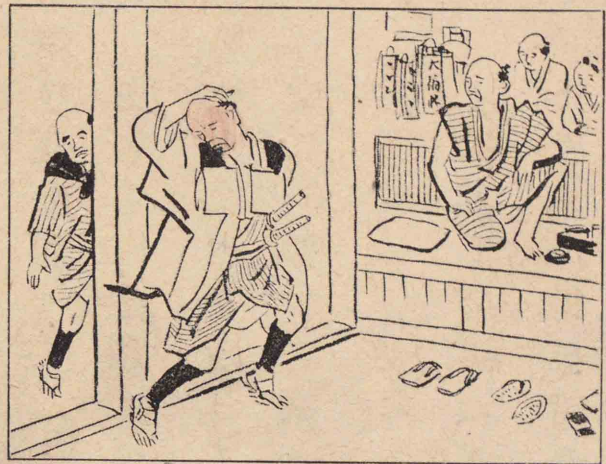
彌次郎は人夫の親方の所へ行つて、武士らしい言葉で言ひました。

「身どもは主用で通る者だ。川越し人足を頼むぞ。」
「かしこまりました。御同勢はお幾人で。」

「なに同勢か。武士が十二人、槍持やぐり草履取、其の外都合三十人。」

「して其の方々はどこにおいででございます。」

「いや、江戸を出立する時は三十人であつたが、道中



ろ。

親方は急に言葉をかへました。

「高けれや、止めてさつさと行くがい。」

で追々病氣を致し、宿々に残し置いた。それで、今同勢といふのは、上下合はせてたつた二人だ。」

「お二人なら、連臺で四百八十文でございます。」

「いや、それは高い。少し負け

「これ、武士に向かつて何たる無禮な言葉だ。」
「お前、それで武士か。其の刀を見るがい。」
ふりかへつて見ると、革の鞘袋が柱につかへて、くの字なりに曲つてゐます。

「は、は、は、大笑ひだ。彌次さん、さあ行かう。」

と、北八にさそはれて、彌次郎はそこへに逃出しました。

三 大原女

とうとう京都に來ました。四條通を歩いてゐると、大原女たちが、柴や、すりこ木や、槌や、梯子や、其の外

何でも頭にのせて賣歩いてゐます。彌次郎も北八も、珍しさうに眺めてゐました。すると、一人の大原女が彌次郎のそばへ寄つて来て、

「此のれん木を買つて下さい。」

と言ひます。彌次郎、

「何だ、すりこ木か。そんな物はいらなひよ。」

「何なりと買つて下さい。」

彌次郎は、じようだん半分に言ひました。

「梯子なら買つてやらう。幾らだ。」

「安くして置きます。七百文下さい。」

彌次郎はどうせ買ふ氣ではありませんが、

「高いく。二百なら買つてやらう。」

と言ひました。

旦那、あんまりです。五百にして置きますせう。」

「いや、く、二百でなくては買はないよ。」

「ようございます。まけて置きますせう。」

「やまけるのか。情ない事を言ふ。」

「さあ、持つて行つて下さい。」

「いや、おれは旅の者だ。梯子をもらつても仕方がない。あやまる、あやまる。」

しかし、かうなると女は何と言つても聞入れませ
ん。とう／＼彌次郎は梯子を買はされてしまひま
した。

「これ、北八、お前これをついで
くれ。」

「どんでもない。一體、何だつて
京の真中で梯子を買ふのだ。
ばか／＼しい。」

「仕方がない。差合ひでかつが
う。お前もつき合つてくれ。」



巻九

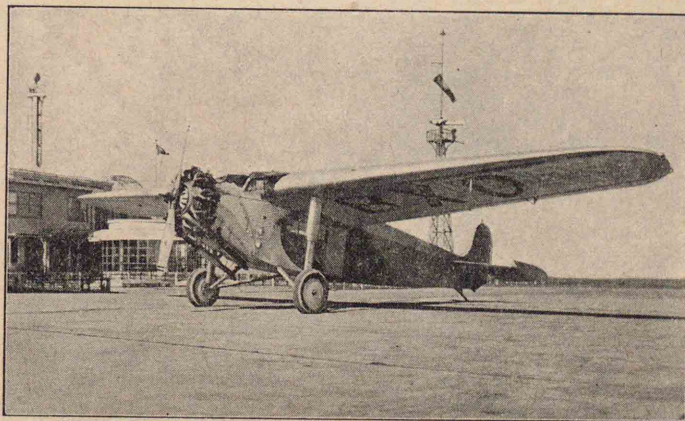
二人は長い梯子をかつぎながら、京都の町を見物し
て歩き廻りました。

第二十五 空の旅

日和

東京から大阪へ飛行機で——かう考へるだけで
も實に愉快だ。殊に今日は、風もない秋日和である。
機内の席に着くと、小さいとびらが外からぼんと
しめられる。何のことはない、旅客機といふものは、
自動車を細長くして、それに大きな翼を附けたもの
と思へばよい。

見送りの人と窓越しに顔を見合はせて笑つてゐる中に、プロペラが物すごくうなり出した。午前九時である。皆が手を上げて別れの合圖をする。何時の間にか機體が滑り出して、ぐんぐん速力が加る。振向いて見たが、後に窓がないので、誰も見えなかつた。廣い飛行場が盡きて前は川だと思つた頃、機體はもう空中に浮かんでゐた。



然

ほつとしながら下界をのぞくと、海だ、船だ、たくさんの人家だ。それにしても、空中から見る市街は、何とまあ、整然とあざやかに美しいものであらう。これが横濱かなと思ふ間もなく、もう前には小山が續いてゐる。段々島の野菜が、ふるひ附きたい程あざやかな緑を見せる。山と山との間に、黄色い川のやうに見えるのは、稻田であつた。森、人家、道路、島、さういふものが模型圖のやうにきちんとしてゐる。其の間を縫つて真直に走るものは、私たちの乗つてゐる飛行機の影法師であつた。

示 筆 片

左に太平洋が白く光つて見える。晴れてある割合に、今日は遠望がきかない。地平線のあたりは、ぼつとかすんである。右は山々が近く見える。何時の間にか、青空に富士が見え出した。

前の小窓があいて、機關士が紙片を差出した。「前方箱根山」と書いてある。同乗者が、順々に渡しながらいなづき合ふ。機内では自分の聲さへ聞えない。談話は筆談か手まね、急に啞おしになつたと同様である。これから後も書附が度々廻る。

高度計はぐんぐん上つて、一千三百五十米を示し



た。それと共に、あの偉大みだいな箱根の山々が、片端から眼下にひれ伏し始めた。九時二十分であつた。

山といふものを空中から見下すと、意外にはげた場所の多いのに驚く。頂の岩角が手に取れさうにはつきりと見え、た次には、深い谷が、どん底に大きな口を開く。下界は今大波の如くうねつてゐるのだ。と、前方に湖が見え出した。蘆湖あしのこである。何といふ美しい濃い青さであら

玩

う。やがて、湖の一角をかすめるやうに通り過ぎる。湖畔の家、道路を走る自動車、すべてが玩具のやうに小さく、玩具のやうに美しい。

沼津から、一直線に駿河灣の上空を飛行する愉快さ。長い汀が、まるでかなで面を取ったやうにきれいに続く。海水は、繪の具をどかした水だ。よく見ると、海上一面の波は美しい縮緬であり、點在する漁船は無数の胡麻粒である。高度計は一千百米を示してゐるが、富士はやつぱり横雲の上の青空にくつきりとそびえて、其のすそを長く下界に引いてゐる。

濁流

川原

弱

移

富士川が注いで、其の濁流を遠く海上に押出してゐるのが見られる。眞青な繪の具の水に、グリーンムを流し込んだ美しさだ。

三保の松原は、意外にもあつけないものであつた。あの美しいいたくさんな松も、二列か三列に並んで生えた川原よもぎとしか見えない。すべて眞上から見る樹木は、すこぶる貧弱である。

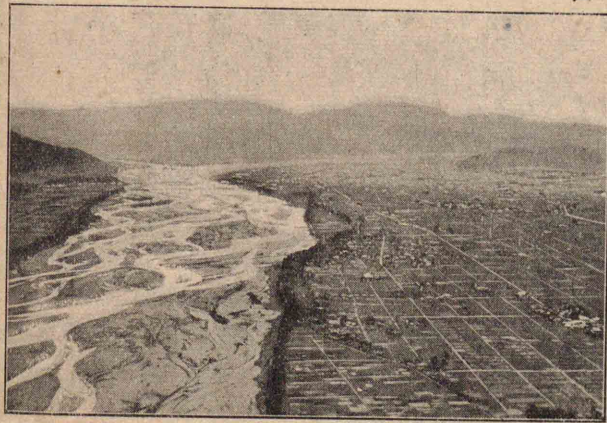
再び陸に入った。下界は、一見はなはだゆるくと移動してゐるが、それでゐて、すべての物があつと

東

いふ間に過ぎてしまふ。静岡の上空を通つたのも
東の間、すぐに安倍川を越えて又山である。

大井川をしり目に掛けて渡り、それから七分の後
天龍川てんりゅうを越え、更に六分の後濱名
湖の北角をかすめる。まるで道
中すごろくを飛んで行く氣持だ。
空にはだんく、雲がふえて来る。

岡崎おかざきを過ぎてから、廣い平野が
續いた。一望の田圃てんぼが、ちやうど
方眼紙のやうに、整然とくぎりを



静岡九

隻

見せて遠く廣がる。高度は三百米を下つて、下界が
手に取れさうになつた。東海道の松並木が見える。
道路が十文字に交る。十字路を中心にして、こゝか
しこに村落や町が點在する。鐵道が見える。電車
が走る。自動車自動車が飛ぶ。人影が動く。

再び海へ出た。右手に築港があり、汽船が數隻か
かつてある。名古屋だと思ふ途端、プロペラが止つ
て、後は空中滑走である。大地が見るく、盛上つて、
機は軽く地上ををどりながら滑る。十時三十五分
である。

隣 志 離

名古屋はすつかり曇つてゐた。汽船が數隻見えるだけで、市街は望むべくもない。大地を踏みしめて歩いてみる。耳はまだがんく鳴つてゐる。私の隣席に乗つてゐた軍人さんと話し合つてみたが、はつきりと通じない。聾同志のやうに、やたらに大聲を發するだけだ。

十一時、又機上の人となる。長い滑走の後離陸すると、やがて方向がきまつて、左に伊勢灣がはるかに續く。右手には大きな川じりが幾つ。

四日市を過ぎて、平野から次第に山地に移る。高

帝國丸

脚



度計は遠慮なく上つて、又も千米を突破する。脚下には、鈴鹿山脈がうねり始めた。途端に機體がすんと落ちる。私は思はず前の椅子につかまつた。又すんと落ちる。エヤポケットだなどと思ふ。隣を見ると、軍人さんが笑顔でうなづく。右手に遠く

琵琶湖らしいものが見えた。

山地はなほしばらく續いた。

十一時二十三分、左にや

や遠く大きい都市を望んだ。軍人さんは地圖を指して、それが奈良であることを示してくれる。大和やまと平野が、繪のやうに美しくかすんでゐた。

生駒山いこまの頂をかすめながら過ぎると、前は一望の平野だ。田圃の間に、數條の道路が縦に横に續く。青空の末に墨のやうな雲、それは大阪のおびたゞしい煙であつた。

遂に大阪が來た。一面は家の海である。高度がぐんぐん落ちて、町々がはつきり見える。みぞのやうな街路を、きゆうくつさうに自動車走つてゐる。

堀がある、たくさんな船だ。一體どの邊だらう、天守てんしゆ閣かくはと思ふ瞬間、長い花壇くわだんが過ぎた。天王寺公園であつた。

機は市街を西へ突抜けて、とうとう海へ出た。港の光景が、なゝめに浮上つて目に映じた時は、もう方向を轉じて、海から飛行場へ滑り込むやうに降つた。十一時三十七分であつた。

廣い飛行場に下りて、羽衣を失つた天女のやうに、とぼくと歩く。聞けば、軍人さんは今日午後福岡へ飛び、明日は更に臺灣たいわんへ飛ぶのださうだ。乗るま

女

では幾らか不安もあつた飛行機が、かうも愉快で安
全だと知ると、私はつくづく此の軍人さんが、うらや
ましくてならなかつた。

第二十六 もくせいの花

学校の道すがら、

見つゝ行く

此の家の庭、

もくせいは

今年も咲きぬ。

金色に咲きこぼれ、

枝々に

こぼれ匂^{にほ}ひて

もくせいの

ゆかしきかをり。

なつかしき師の君を、

見送りし

去年^{こぞ}の今頃、

香

此の花の
盛りなりけり。

秋の空、香も高く、

もくせいはいは

今年も咲きて、

師の君を

しみく思ふ。

第二十七

たちけな
橘中佐

斬

章

敵は山によりて陣地を固め、盛に弾丸を打出す。我が兵これを物ともせず、敵陣目がけて突撃すれば、敵は劔の林を以て我を迎ふ。橘中佐、真先に立ちて敵中にをどり入り、忽ち三人を斬倒す。

敵の弾丸、雨あられの如し。中佐、すでに右手に傷を受けたれども、左手に軍刀を振るひて、部下の兵士をばげましはげまし、遂に日章旗を山上に立つ。時は明治三十七年八月三十一日、朝日のいまだ上らざる頃なりき。

敵はこれを見て、三方より盛に大砲を打ちかく。

堅

いかに心は堅くとも、身は鐵石にあらざれば、砲丸に倒るゝ兵士數知れず。敵はすかさず、更に新手を加へて攻來る。中佐は大音に、

「一度國旗を立てたる此の

高地、全滅すとも敵の手に

渡すな。一步

も退くな。」

と叫びて、敵を撃退する

こと數度。中佐すでに



浮國九

退

第二彈を左手に、更に第三彈を腹部に受けたれども、少しもひるむ色なく、なほ奮戦を續けたり。忽ち砲彈の一破片、其の腰にあたり、中佐はどうと其の場に倒れたり。

かたはらにありし内田軍曹は、急ぎ中佐をざんがうの内に助け入れて介抱す。戦ますく烈し。中佐、目を見張りて、軍刀を杖に立上らんとす。軍曹、中佐を背負ひ、彈丸の下をくゞりて、けはしきがけをかけ下る。

ほつと一息つく折から、飛來る一彈、又も中佐の胸

を貫ぬき、軍曹の胸をも貫ぬく。二人は一度に打倒されて氣を失へり。

吹く朝風に、中佐も軍曹もふと我にかへれり。軍曹かたはらにありし負傷兵と共に、中佐をいたはる折から、敵の突撃の聲盛に聞ゆ。陣地は再び敵に取返さるゝにあらずや。中佐は言へり。

「残念なり。多数の部下を失ひて占領したる陣地を取返さるゝか。」

と。更に形を正して言へり。

「今日は、我が皇太子殿下の生まれ給ひし日なり。」

望 捧

此のめでたき日に一身を君國に捧ぐるは、まことに軍人の本望なり。」

と。靜かに兩眼を閉ぢつゝ、聯隊長將兵の安否を次に尋ね、ほとんどおのれの苦痛を知らざるもの如し。

中佐の全身は次第に冷えぬ。日も暮れんとする頃、

「軍刀はあるか。」

の一語を最後として、遂に息絶えたり。

橘中佐は、平生志堅く、勇氣に満ちたる軍人にして、

絶

冷

烈

上を思ひ、部下をあはれむ心深かりき。此の平生の
行ありて、此の壯烈なる死を遂ぐ。中佐が多數の戦
死者中、特に軍神とあがめらるゝもうべなりといふ
べし。

第二十八 國語の力

幼

ねんくゝころりよ、おころりよ
ばうやは好い子だねんねしな。
誰でも、幼い時、母や祖母にだかれて、かうした歌を
聞きながら、快いゆめ路にはいつたことを思ひ出す

榮

であらう。此のやさしい歌に歌はれてある言葉こ
そ、我がなつかしい國語である。

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
いはほとなりてこけのむすまで

此の國歌を奉唱する時、我々日本人は、思はず襟えりを
正して、榮えます我が皇室の萬歳を心から祈り奉る。
此の國歌に歌はれてある言葉も、また我が尊い國語
に外ならない。

我々が、毎日話したり、聞いたり、讀んだり、書いたり
する言葉が、我々の國語である。我々は、一日たりと

學

育

佛

も、國語の力をかりずに生活する日はない。我々は國語によつて話したり、考へたり、物事を學んだりして、日本人となるのである。國語こそは、まことに我を育て、我々を教へてくれる大恩人なのである。

此のやうに大切な國語であるのに、ともすれば國語の恩をわきまへず、中には國語といふことさへも考へない人がある。しかし、一度外國の地を踏んで、言葉の通じない所へ行くと、誰でも國語のありがたさをしみぐと感ずる。かういふ所で、たまぐなつかしい日本語を聞くと、まるで地獄ちごくで佛にあつた

佛國九

泉

育

系世

現

心地がし、愛國の心が泉のやうにわき起るのを感じるのである。アメリカ合衆國がっしゅうこくや、ブラジル等に住んでゐる日本人は、日本語學校を建てて、自分の子供たちに國語を教へてゐる。日本人は、日本語によつて教育されなければならぬからである。

我が國は、神代このかた萬世一系の天皇をいたゞき、世界にたぐひなき國體を成して、今日に進んで來たのであるが、我が國語もまた、國初以來繼續けいぞくして現在に及んでゐる。だから、我が國語には、祖先以來の感情精神がとけこんでをり、さうして、それがまた今

唱 離

日の我々を結び附けて、國民として一身一體のやうにならしめてあるのである。若し國語の力によらなかつたら、我々の心は、どんなにばらくになることであらう。してみると、一旦いったん緩急くわんきふある時、國をあげて國難におもむくのも、皇國のよるこびに、國をあげて萬歳を唱へるのも、一つには國語の力があづかつてあるといはなければならぬ。

國語は、かういふ風に、國家・國民と離すことの出来ないものである。國語を忘れた國民は、國民でないといはれてゐる。

國語を尊べ。國語を愛せよ。國語こそは、國民の魂の宿る所である。

季堤淡翼操敗州秒績輸術類差
 脚總艦警戒員副奏清臣價求欲
 久費志封灣街茂料題牧處巡序
 條奇齒俳詩期濃彩舍握絹濁祖
 恩脇銳際盡舊利率倍枕援賴朽
 謝捕伏冊錄庫姓歷史旬斗極寫
 覺更球刺麻尉忙鹽唱骨柳歎河
 至蹈致然筆示玩隻離斬章堅捧
 絕榮育系

終

尋國九

昭和十五年九月廿八日修正印刷
 昭和十五年十月三日修正印刷
 昭和十五年十一月五日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文
部
省

小學國語讀本卷九尋常科用
 定價金拾五錢

昭和十五年十月四日
 文部省檢査濟

發行所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
 東京書籍株式會社

印刷所

株式會社工場

翻刻發行 東京書籍株式會社
 兼印刷者 代表者 石川正作

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
 七番地

広島大学図書

0130449513

